
CROSS ROAD 【ディール急襲】 第一部

かりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSS ROAD 【デイル急襲】 第一部

【Nコード】

N6569V

【作者名】

かりん

【あらすじ】

発端はデイル領家による商都急襲の報だった。強気で姑息でちよつぱり我がまま——そんな庶民な奥方様が行く手をはばむ災難・皺よせなんのその、凜然果敢に立ちむかい奮闘しちやう物語。

☆オリジナル・ファンタジーサイト【極楽鳥の夢】からの転載です。

プロローグ

プロローグ

ところはカレリア王国クレスト領家。国土北方を領有する、かの領家の閨である。

ここに、若き当主ダドリー・クレストに見そめられ、華やかなりし商都から大陸最北端ノースカレリアの片田舎まで、はるばる嫁いだ奥方様がいた。その名もエレーン・スレーター。公家筆頭ラトキエ領家にてメイドを務めた御仁である。すったもんだの騒動の末、領家の嫁にめでたく収まったこの彼女、幸せいっぱい大手を振って、いそいそ嫁いだまでは良かったが――。

ところが、着いた早々、由々しき事態が持ちあがる。それは、

「子供がいる!？」

エレーンはあんぐり絶句した。

「――ああ。男の子が一人、な」

新婚のベッドの隣には、ごろりと寝転がった新郎ダドリー。そして、無駄に頬つぺた搔きつつも、コソツとさりげなく目をそらす。

エレーンは二の句がつけずに氷結した。なにせ婚家は人もうらやむクレスト領家。（投げ売り間際で）玉の輿にのり、るんるん嫁いできたところ。前途洋々、将来有望、期待値うなぎのぼりのピンクの夢は、るんるん甘ったるい蜜月生活。二人の前に置かれているのは、夫婦仲良く手に手を取りあい、描き上げていくべき真っ白なキヤンバス――

のはずだった。

そう、この結婚は堅実な布石のはずだった。十全磐石な永久就職のはずだった。輝かしい未来に向けての記念すべき第一歩を、今ま

さに踏み出したばかりなのだ。なのに——ああ、なのにそれなのに、彼には既に、

”子供がいる”　だあ？

利き手の拳を不穩に震わせ、エレーンは隣の詐欺師をねめつける。これはまさに青天のへきれき。華やかなりし華燭の典、その興奮も冷めやらぬ、えへらへらとくねった背中に冷や水ぶっかけられたも同然である。

そうとも。寝耳に水ってやつである。驚天動地の事態である。聞いてない！　ってヤツである。なんといっても、きっちりかつちり新婚そのものなのである。

さあて、みな様、お立ちあい。

ご用とお急ぎでない方は、どうぞ見てっておくんなまし。メイドあがりのこの彼女、万難排して、幸せをつかむことができるのか。

強気で姑息でちよっぴり我がまま、そんな庶民な奥方様が、災難・しわ寄せなんのその、凜然果敢に立ち向かい、奮闘しちゃう物語。

プロローグ（後書き）

こちらはサイトで掲載している物話をまとめたダイジェスト版です。
サイトの方では、最新話…第2部5章までお読みいただけます。

序章

序章

「……でも、どんな女だ？」

やはり、エレーンは気になった。よって、世話係の執事を締めあげ、妾宅の所在地を白状させた。昨夜勃発した修羅場の後の、その後の断絶は言うに及ばず、ダドリーは往生際悪くぶちぶち言い訳を積みあげていたが、つまるところ、こういう話だ。

かの妾はダドリー十七の弱年のみぎり、両家の縁付けのために押し付けられたものであり、互いに愛情があるわけではない。なにぶん大昔の出来事なので、かかる妾子の存在は今やあまりに当然であり「うっかり申告し忘れた」のだと。だが、そんな「うっかり」が平気でまかり通るほど、この世の中は甘くはないのだ。

当然のごとくに不実をなじれば、しかし、あのダドリーは、

「バカバカ言うなよ。あのな、知ってるか？ バカって言うやつが本当は一番——」

この期に及んで、なんたる減らず口。無論、すぐさま撃沈したとも。

だが、呆れ果てたお気楽男には、負い目などはない様子。ついには口を滑らせて、妾自慢まで披露する始末だ。これで往なされる女バカはいない。とはいえ——

所在なさげにコソコソしているダドリーを、白けた白眼視で冷ややかに見つつも、エレーンはぶつくさ考えた。どれほど気さくに見えるようが、彼は歴とした領家の当主。今やカレリア三大公家の一翼を担うクレスト領家の主なのだ。由緒ある血統を絶やさぬ為に妾を

置くというのもよくある話。そう、彼はそんじよそこの市民ではない。それを承知で、こんな遠い片田舎まで遙々嫁いできたのではなかったか。

ならば、どうにも嫌ではあるが、妾の存在もやむなしか。というより、いつまで拗ねて腐ったところで、どうにかなるような代物でもないのだ。現に妾と子供がいるのなら、どんなに怒って詰め寄ったところで、今更消えてなくなりはない。

自分を無理やり納得させて、ようやく不満を飲み込んだ。更には、ダドリーが翌朝、あまりに哀れっぽくおどしたりするものだから、そして、あまりに熱く愛を囁くものだから、うっかりほだされ、丸め込まれそうにもなったが、次の思わぬ一言で、エレーンの心は凍りついた。ダドリーはこう言ったのだ。

「俺はもう、子供は要らない」

事もあるうに、幸せな家庭を夢見ていた、嫁いだばかりの妻に向かって。

「そりゃあ俺だって、あんたの子の方がいいに決まってるさ。でも、仕方がないだろ。現に俺には、もう後継ぎがいるんだから」

ぬけぬけと言い、ああ、とようやく合点したように顔をあげた。
「心配しなくても、子供がいなくなつて、ないがしろにはしないよ。俺にはあんたが一番大事だ。責任を持って、生涯俺が面倒をみる。だから、そんなに怒らなくても」

罵倒の言葉を山ほど吐き捨て、エレーンは居間を飛び出した。

「――なによ。妾は置かないって言ったくせに」

避暑地に適した北カリリアの気候の中、緑梢ゆれる閑静な庭の裏道を進み、生垣の緑に目隠しされた鉄柵の陰に身を潜める。件の妾宅に敵情視察にやってきたのだ。

夏の陽揺れる青芝の上で、ダドリーは空に、子供を高く抱き上げていた。

「――お？　大きくなったな、クリード。お母さんの言うこと聞い

て、ちゃんと良い子にしていたか？」

曇りのない笑顔だ。ダドの奴！

「はい！ お父さま！」

はきはき元気に良いお返事。見るからに小生意気そうなガキだ。年の頃は五歳というところだろうか。腕白そうな男の子。隣には、線の細い優しい女が一人——あれがお気に入り、サビーネちゃん、ね。

それは清楚な女だった。まだ、あどけなささえ残る顔立ち、子持ちのそれにはとても見えない。年は確か、ダドリーより一つ下の二十二才、だったか。腰まで伸ばした黒い直毛、大きな瞳、広い額。優美で繊細そうな面差し。肌の色が白いせいか、病弱そうで、大人しそうだ。エレーンは腕組みで品定めた。

（ふーん、深窓のご令嬢ってわけね。今までにない人種だわ……）
つまり、アレに勝っての？

虚しい溜息で、頬を掻いた。神様は意地悪だ。なんの因果でそんな試練を。ともあれ、ああいう弱々しいタイプは初めてだ。ご令嬢の友達もいるにはいるが、彼女はおしとやかな奥ゆかしさは程遠い。

穏やかな日ざしの青芝の上、親子三人の笑顔が揺れる。親子団らの予期せぬ光景。戯れる彼らは幸せそうだ。ダドリーのことはよく知っているはずだった。なのに今は、見知らぬ他人を見るようだ。黒い鉄柵を両手でつかんで、エレーンは身じろぎもせず凝視していた。ダドリーをここで見つけたら、怒鳴り込んでやろうと思っていた。耳たび引つつかんで引きずり出してやろうと思っていた。なのに、いざ、それを目の当たりにすれば、足が一步も動かない。彼らの姿はまぶしくて、近づくことさえできなかった。彼らの笑顔が、光の庭が、いやに遠く輝いて見える。目を背けたいの、背けられない。

「——強引に引っ張ってきたくせに」
見つめる瞳に涙があふれた。こんなに遠くまで引っ張ってきとい

て、手を放すつもりなの？ あんたがこんな所まで連れてきたのよ？
伸ばしたこの手が届かない。

あのダドリーに届かない。こんなに近くにいるというのに、ダドリーはまるで気づかない。ここに自分がいることに。彼の優しいまなざしは、天に高く抱きあげた我が子の笑顔に向けられている。そして、若く美しい母親に。当然だろう。彼らは”家族”なのだから。
「……こっち向いてよ、ダドリー」

黒い鉄柵が、手に冷たい。

「あたしを見てよ、ダドリー」
指の先が震えだす。

「今更ひとりで見捨てられたら、あたし一体、どうしたらいいの？」
エレーンは泣きじゃくっていた。他に何ができただろう。すぎる想いで見つめる他に。緑陰にたたずむ自分と異なる、日ざしのただ中で戯れる彼らを。

屈託なく、子供が笑う。母親が笑う。ダドリーが笑う。

「……なんで、あんたが”そっち側”にいるのよ」

自分の横にいるべき彼が、何故、向こうにいるのだろう。向こうに与くみしているのだろう。青芝の庭は、平和な光に満ちている。安らぎに満ちた穏やかな空間。明るく温かな世界から、自分一人が締めだされてしまったようだ。

——あたしは輪の中に入れない。

ダドリーは「子供は要らない」と言ったのだから。自分の子供は「要らない」と。ならば、あの幸せの光景は、この自分の未来とは生涯無縁のものなのだ。

居たたまれない思いで踵を返し、エレーンは肩を落として逃げ戻った。”他人”をやんわり排除する、明るく平和な空間から。

手にしたグラスを一気におおり、とん、とそれを卓に戻した。琥珀の酒精が芳香を放ち、グラスの中でゆったり揺れる。

豪華で退屈な屋敷の中で、エレーンは酒をあおっていた。苛立ちの種は無論のこと、先日、目に焼きついた家族団らんのあの光景、妾宅で目撃した幸せの構図だ。

酔いで痺れた額を揉みつつ、エレーンは無機質な液体に目を据える。そこに何らかの意味を読みとろうとでもいうように。

気怠い仕草で黒瓶に手をかけ、奪うようにして引ったくった。半分に残った黒瓶を、空いたグラスに手酌で注ぎ足す。だが、この時ばかりは、普段ならば大好きな酒も不快を軽減する一助にもならなかった。疼くような胸の痛みを麻痺させてくれるどころか、むしろ感情の振れ幅が大きくなって手に負えなくなってくる。

そう、分かっているのだ。ダドリーは一介の庶民ではない。今や押しも押されもせぬ三大公家のご当主様。それはちゃんとなんか分かっている。だから、妾を囲うこともあるのだと泣く泣く諦めたはずだった。けれど――。

エレーンは深く溜息をついた。やはり、あれ以来、喧嘩が絶えない。彼のすることなすこと気に障り、ますます険悪になっていく。そうなればテキも面白くはないらしく、不貞腐って出て行ったきり、新婚の居室に戻らない。近頃では寝室さえも別々になったという悪循環――もっとも、それは、己が閉め出したのが発端なのだが。

ああ、きつと今頃は、妾の所にでも転がり込んで、女々しく愚痴っているのだろう。なにせ、あそこには子供がいる。ダドリーはああ見えて子煩悩のようだから――。けれど、彼にとっては我が子でも、こっちにとっては赤の他人だ。

「……なんで、あたしが、こんな目に遭わなくちゃなんないのよ」酔いで気怠い額をつかんで、もう何度目になるか分からぬ溜息をついた。幸せな家庭を築く夢、早くもそれが打ち砕かれてしまっていた。しかも、ささいな浮気どころか、公の妾子であると、敵は平気な顔で居直っているのだ。不慣れな領邸の面々もツンケンしていて嫌な感じだ。メイドあがりと侮っているのが、ありあり分かる。

ああ、まったく面白くない！ 故郷の商都にいつそ帰ってやろう

かしら！

事情を執事から聞き及び、エレーンはダドリーの執務室へと駆けつけた。ラトキエ領家が使わした使者に、ダドリーが門前払いを食らわせたというのだ。

カレリア国には、三つの公家がある。ラトキエ、ディール、クレストの各領家だ。もっとも、その実体は小国の集合体と変わりなく、国王サディアスの統治の下、遠く離れた各領家がおのの独立採算で自活自立し、緩く連携しているというのが実情だ。三領家は調和と協調を以て結束し、初代国王が即位してこの方、ラトキエの治領・商都カレリアを中心とする平和な国家運営に尽力してきた。国土を荒らす戦がない為、国は栄え、民の暮らし向きは安定して豊かだ。

その三領家の宗主ラトキエ領家が、今、前代未聞の危機的状况に直面していた。首都である商都カレリアを、事もあるうにディールの軍に急襲・包囲されたのだ。この未曾有の暴挙の報は、エレーンが嫁いだ遠い北方にまで届いていた。

大振りな執務机の両端に決裁書類を積みあげて、ダドリーは白羽のペンで書き物をしていた。大振りな椅子をギシリと鳴らし、椅子の背もたれに寄りかかる。思い余ってつめよると、彼は落ち着き払って平然と返した。

「会って書状を受け取っちゃったら、人を出さなきゃなくなる」
エレーンは愕然と見返した。「——助けに行かないつもりなの！」

「ああ」

胸を抱き寄せようと伸びてきた手を振り払い、エレーンは翻意を促した。だが、ダドリーの決意は固く、あくまで首を縦に振らない。

「そんな余裕はどこにもない。ここは戦のない片田舎だぞ」

「でも！」

「この市民は、なんの訓練も受けていない、戦にはすぶの素人ばかりだ。訓練されたディールの兵と一体どうやってわたり合う。――

——土台無理な注文だ。万に一つの勝ち目もない。そんな真似は如何にも無謀だ。今、商都に領民をやる訳にはいかない」

できる事と、できない事とがある、とダドリーは言った。この辺りはただでさえ豊かとは言い難い土地柄だ。商都やトラビアのように潤沢な蓄えがあるでもない。壊滅的な被害を受ければ、二度と立ち直れなくなるだろう。そもそも商都に駆けつけたところで、武力なしでは助けにならない。ならば、静観するより道はない——つまり、自分が長らく暮らした街を、かつて笑い合った友人たちから「助けてくれ」と乞われたその手を、薄情にも突き放す、と彼は言うのだ。何より商都は、エレーンの懐かしい故郷でもある。きっぱり、ダドリーは言い放った。

「俺は、商都からの使者には会っていないし、何も知らない」
すぐさま取りついて懇願したが、何を言おうが無駄だった。ダドリーはあくまで首を振る。

「なんと言われようとも、助けは出せない。俺には、領民を守る義務がある」

「——あんたって人は！」

冷え固まった奥底から、何かが沸々と込みあげた。制御できない怒りのままに、エレーンは顔を振りあげた。

「人でなし！ 自分さえ良ければ、それでいいの！ あんたはそれで満足なの！ ダドのばか！ 大っ嫌いっ！」

なだめる手から憤然と飛びのき、執務室から飛び出した。

ドアの鍵穴から廊下を覗いて、エレーンはぶちぶち毒づいていた。鍵穴の形に切り取られた廊下では、寝室から閉めだされたダドリーが、肩を落として嘆息している。だが、ゴネるでも怒るでもなく、ドアに背を向け、すぐすこ廊下を引き上げていく。エレーンは苛々舌打ちした。

「男なら、押し倒すぐらいのこと、してみせたらどうなのよ！」
普段であれば、強引な面さえ見せるダドリーだが、事エレーンに

対しては、いつも、たいそう聞き分けが良い。嫌だと言えば、無理強いなどは決してしない。だが、それさえ、今のエレーンには腹立たしい。

とはいえ、エレーンの苦難はこの件だけに留まらなかった。

事もあるうにダドリーが、どろん、と失踪しやがったのである。

夢の石

詰め所の手すりに置かれた ” それ ” を、門衛はちらりと眺めやった。透明度といい、曲線を描いた片面といい、いつもより若干美しくはあるようだが――。

目の高さにまで摘みあげ、ためつ眇めつじっくり眺め、だが、厚布の敷かれた背後の棚へと、ぶっきらぼうに押しやった。それはガラクタとも見まごう翠石のかけらだった。丸い面をわずかに残して割っ欠けている。今度も ” ハズレ ” であるようだ、と密かに落胆、視線を戻す。その先には、小遣い銭を首尾良くせしめて、いそいそ戻る釣り人の背。

ここは大陸北方、クレスト領家、北の邸門にある検問所である。詰め所の窓の手すりには「回収窓口」と書かれた立て札、そして、今しがた詰め所に持ち込まれてきたのは、緑色をした石ころのかけら、いわゆる「夢の石」と呼ばれる代物である。

そう、” 夢の ” 石。この安易な呼び名が示す通りに「人の世の望み、すべからく叶えます」というなんとも豪気な代物である。もつとも、それが ” 本物であれば ” の話だが。

夢の石にまつわる逸話は、この手の胡散臭い事例のご多分に漏れず、古きは創世物語の昔から、古今東西、津々浦々、脈々と語り継がれて現在に至る。「賊の奇襲に遭遇した小さな村の長老が、秘蔵の石で絶体絶命の危地を脱した」或いは「敵中に取り残されて陥落寸前の敗残部隊が、突如出現した少年の石により、辛くも窮地を救われた」等々。

だが、今、問題であるのは、それらおとぎ話の内容ではない。そうした石の出自である。それというのも「カレリア北方、北の河原で拾った」との証言が滅多やたらと多いのだ。そうして、これは領

土を治める為政者にとって、頭の痛い厄介事に他ならない。なにせ、この夢の石ときたら、拾った者の氏素性にかかわらず、願いをすべからく叶えてしまうというのだから。

看過しえぬ事態を受けて、クレスト領家は夢の石の回収に乗り出した。言い伝えと同様の外見の石を、すべからく没収しようというのである。協力者には相応の謝礼を支払う旨、声も厳かに公告し、ここ北門検問所には、専用の回収窓口も設置された。しかし、それを聞いた領民が、是幸いと日々持ち込むその数たるや――

「……畜生。まうた、いっぱいになっちまったか」

回収棚に背をひねり、門衛はうんざり頭を抱えた。厚布の敷かれた三段構えの木棚には、大小様々、形も様々、不揃いな翠石のかけら達がズラリと一列に居並んでいる。かつて別の用途で設えられたのであろうこの棚も、お触れが出た今となっては、件の石ころ専用の一時預かり保管所と成り果ててしまった感がある。とはいえ、そんな公示を出すものなら、こうした事態に陥ろうことは火を見るよりも明らかである。石など河原に腐るほど転がっているのだから、いや、そもそも、石など集めたところでキリがない。まさに、その一語に尽きた。もっとも、引き取りの条件は”緑の”石に限定されているから、珍しいといえ、そう言えなくもないのだが、しかし――しかし、である。

麗らかな陽気の窓の外、敷地西にそびえ立つ豪壮な領邸を振りあおぎ、門衛はそつと溜息をついた。つい先日、母屋に運んだばかりである。そう、前回の運搬からまだ三日と経っていない。棚から石ころを追いやって、たまった埃もきれいに払って、さあ、やっと清々した――！ と伸びをしたのも束の間で、あつという間に元の木阿弥、又しても満員御礼、大盛況の有様である。

日々が経つのは、いかにも早い。とはいえ、保管場所が埋まったからには、さっさと場所を空けぬことには、次の持ち込みに対処できない。扱うブツの性質上、積み重ねるなどは以ての外、粗雑に扱っては絶対いけない事情があるから、鎮座まします石ころどもに、

可及的速やかにお立ちのき頂き、母屋の方へとお連れせねばならない、という三段論法的、強迫観念的緊急任務が否が応にも生じてしまふことに相なるのである。そもそも「ああ、そこで（暇そうに）突っ立ってるだけなら、ついでにこれもやっといてくんない？」この手の窓口業務など、かつたるい雑用以外の何者でもない。実際、畑違いもいいところである。ぶっちゃけ、やってらんねえってな話である。仕事を勝手に増やされたところで、給料が増える訳でもなし！

無論、表立っては言えないが。

門衛は詰め所の事務机に頬杖をつき、いかにもげんなり、満杯の三段柵を見ていたが、つけ終わった回収記録にペンを無造作に放り込み、溜息と共にパタリと閉じた。限らない徒労感に背を押され、それでも、よっこらせ、と腰をあげる。柵の下に立てかけた運搬専用トレーを取りあげ、翠石をひよいひよい移していく。その手付きたるや慣れたもの。脇戸を開けて、少しの間、持ち場を離れる旨、同僚の立ち番に声をかけ、狭い検問所から歩み出た。

制服の肩に、初夏の日差しが降り注いだ。緑豊かな麗らかな邸内。暑くもなく、寒くもなし。実に程よい按配だ。大陸北方の北カレリア地方は、初夏といえども過ごしやすい。夏の日々の快適さたるや、各地からの避暑客が、例年、押し寄せてくるほどである。

裏道を歩いて母屋に向かえば、左に第一政務棟、右の外壁沿いには使用人宿舎、これらの間を通り抜けると、ちよつとした裏庭が右手に見える。その向こうは厨房棟、更に向こうに通用門、更に足を進めれば、領邸前に配された小奇麗な詰め所が現れる。

門衛はトレーを水平に掲げ、込みあげるあくびを噛み殺し、豪壮な母屋に足を向ける。静謐をたたえた広大な屋敷の、そのどこかにいるはずの、当主付きの老執事の元に、これらを運ぶのがお役目である。散歩気分でぶらぶら歩き、いつものように一人ごちた。

「――あほらしい。どうせ又、真っ赤な偽物なんだろうによ」

本物が一つでも混じっていたなら、今頃こんな所を歩いてはいな

い。宿舎に取って返して荷物をまとめ、とうにどこかへ消え失せている。大金持ちに変身して。

そう、年季がかった北の詰め所が、豪勢な屋敷に化けちまったりしないのは、凡そこにある石ころ全てが”偽物であるが故なのだ。運搬者は誰だって、持ち込みの石を受け取る都度、運搬のお鉢が回ってくる都度、密かにそれを願っている。ある時は切実に。ある時は投げやりに。

—— 夢の石よ、夢の石。俺を金持ちにしておくれ！

ともあれ、領邸を護衛すべき門衛が、こんな明るい昼日中から、本来の仕事そっちのけで、胡散臭い事この上ない石ころ風情を呑気に運んでいる、というのだから——門衛は肩をすくめて空を見る。

「平和だねえ……」

まったく平和だ。

四六時中気忙しい商都が拠点のラトキエや、常に緊張を強いられる国境ディールの勤務では、こうものんびりとはいかないだろう。北の端っこの片田舎なんかじゃ事件も起きないもんだから、上に居座る連中も、こんな訳の分からぬ傍迷惑な業務を、暇に飽かして思いつくのだ。そもそも、そんなお宝を手中にしながら、それを領家に差し出して、二束三文に代える阿呆が、どこの世界にいるものだろうか。望めば、願いが叶うのに？　どんな金持ちの権力者にだって成り代わることができるのに？　そう、石に願をかけさえすれば、世界の様相は塗り変わる。

北方特有の高木から、日ざしが麗らかに降っていた。風はゆるやかに吹きわたり、木々の梢がざわついて揺れる。澄んだ夏空を仰ぎやり、凝った肩をこきこき動かし、くわあっ、と門衛はあくびした。のんびり歩く制服の肩に、木漏れ日が静かにちらついた。釣り人に持ち込まれた翠石のかけらが、きらきら日ざしを弾いている。

見向きもされないトレーの隅で。

使者1

使者

絶交したダドリーとは、あれから口もきいていない。むしろ、顔も合わせていない。なにせ屋敷にいないから。人伝に聞いた話では「領地の視察に出ている」というのが不在にしている名目で――だが、それもどうか怪しいものだ。そう、どうせならもっと、ましな嘘をつけばいいのに。

どうせ、顔を合わせるのが嫌なのだ。ちょっと怒ったもんだから、拗ねてイジけてヘソ曲げて。大方、妾宅にでも引きこもり、羽を伸ばしているに違いない。だって、とっ捕まえたあの秘書官、途端に目を泳がせて、おどおどソワソワしていたし。そうよ、どう見たってあの顔は、嘘をついていた顔だもの。

襟元から取り出した緑の石を、エレーンは無然と眺めやる。いわゆる俗に言う「夢の石」、ダドリーの執務室で嚴重に保管されていた珍宝だ。「人の世の望み、すべからく叶えます」という世にもありがたい稀代の秘宝。そんな大層な代物が何故に首飾りにくっ付いているかといえ、その理由は他でもない、こっそり持ち出してやったからだ。

石の紛失が発覚すれば、不届き至極の冷酷男も慌てふためいて困るだろう。つまりは腹いせ、あの石頭ダドリーへの嫌がらせだ。

もったも、どうせ偽物だろうが。願をかけても、願いは何一つ叶わなかったし。妾も子供も未だに健在、ダドリーも翻意しなかった。あれから二週間余りが過ぎていた。商都は未だ軍勢に封じ込められている。だが、悲しいかな、辺境夫人の非力な身では、どれほど一人で気を揉もうが、どうすることもできない。

エレーンはソファアの肘掛にもたれ、開け放った飾り窓から、ぼんやり夏空を眺めていた。普段通りの、ひっそり穏やかで物憂い午後だ。北カレリアの晴れた空には、白雲がぼっかり浮いている。むくむく純白の入道雲。夏の空だ。瀟洒なカップをおもむろに取りあげ、立ちのぼる芳香を静かに楽しむ。麗らかな夏の昼さがり。広い居間には誰もいない。そう、これも、いつものこと――。

「お、奥方様！ 大変でございます！」

優雅な静けさが突如破られ、エレーンは気だるくドアを見た。何かと思えば、駆け込んできたのは、例の世話係の老執事ではないか。妾宅の所在地を白状させた、てっぺんハゲの小柄な執事だ。何があったか、せっぱつまった狼狽ぶり。既に息切れしている小柄な執事は、膝に屈んで息を整え、まあい禿頭を振りあげた。

「旦那様のお姿が、屋敷のどこにも見当たりません！」

エレーンは白けた顔で手を振った。

「――だからあゝ、視察でしょ？ シ・サ・ツ。たく。何を今更そんなこと。まー、どこ視察してるかは、だいたい見当つくけどね」

余裕綽々香茶をすすする。そうだ。妾とイチャつく程度のことで大騒ぎなんぞしていたら、領家の奥方様は務まらないのだ。もちろん澄ました仮面の裏側では、めらめら怒りがたぎっているが――。ともあれ今は、かしくかれるべき使用人の前。威厳を保って、ゆったり優雅に、鷹揚に。ところが、そうは問屋が卸さなかった。

「い、いえ、それが、ご別宅の方ではございません」

「あん？ なら、どこだって言うのよ」

「ですから！ こうして伺っておるのです！ 私共も、てーっきり、そちらにいらっしゃるものとばかりに。しかし、先からは、お見えではないとの返答で」

「……はあ？ つまり、なに？ それって、つまり――」

つまり、”よそ”へ憂さ晴らしに行ったのか？

エレーンはわなわな拳固を握る。妾だけでは飽きたらず！ 見下げ果てたその態度、断じて誓って許すまじ！

「しかも、それだけではございません」

額の汗をハンカチで拭き拭き、執事はそそくさ報告を続けた。「間の悪いことに、ディールから使者が来邸しまして」

「ディ、ディールですってえ！」

ぎよつ、とエレーンは見返した。「ディール」といえば、目下ラトキエを攻めている不埒な仇敵の家名ではないか。以前メイドをしていたエレーンにとって、ラトキエ領家は馴染み深いかつての職場。領邸で働く使用人たちは気心の知れた者ばかり。そして、商都カレリアは生まれ育った大切な故郷だ。

「な、なんで？　なんでディールがウチなんかに来んの！」

余裕こいた虚仮おどしから一転、美しく整った広い居間の白壁を浮き足だつてあたふた見回す。執事は憐れむように首を振り、辺りをはばかりるように見回した。頬に手を当てコソつとのたまう。「ですから、援軍の要請でございましょう？」

「——わかつてるわよ！　そんなこた！」

右往左往の目を止めて、ぬう、とエレーンは睨めつけた。恐慌中の茶々は気に障る。ちらと執事は目を向けた。「して、どうなさいます？」

ぐ、と詰まって、エレーンはぎりぎり拳を握る。お伺いを立てるだけの奴は気楽でいい。

「どうなさいますうって、どーすんのよ！　あの人がどこ行ったかなんて、こっちが訊きたいくらいだよっ！」

「とにかく」

こほん、と執事が咳払いで仕切り直した。「使者が言うには、事は急を要するので、旦那様がご不在ならば、代理の方に書状をお納め頂きたい、と」

「は、はいっ？　代理ってまさか」

エレーンは愕然と己をさす。仰せの通り、と執事はにっこり微笑んだ。

「はい。先方との釣り合いからも、ここはやはり、奥様にご対応頂

くのが一番かと」

「そ、そうだっ！ お義兄様がいるじゃない！ 闊達にして聡明なる、ダドリーの二番目のお兄様がっ！」

「グレッグ様はお加減がお悪いとかで、屋敷へお引き取りになりました」

「はあっ？ いーわけ？ そういう見え透いた手で！」

「グレッグ様より、ご伝言がございます。万事粗相のないように、くれぐれも丁重にご対応になるように、と」

「でも！」

「ご自分は領主ではないから、と」

逃げやがったか。

ついにがっくりうなだれて、エレーンは力なく首を振った。「……いや、無理だってえ。絶対無理。そんなの、あたしにできる訳ないでしょ」

ついこの間まで、しがないメイドだったのである。ほんのつい数日前に、領邸に着いたばかりなんである。ぴらぴらドレスこそ着ちゃいるが、中身は庶民この上ない。

「それにしても、旦那様をご不在というのに、助言もして下さらぬとは」

執事が嘆息して眉をひそめた。「これはやはり、我々は、相当な恨みを買ってしまったようですね。大旦那様のご遺言で、弟君の方を指名されたのでは、面白くないのも道理でしょうが」

先年、先代当主と嫡男が相次いで急逝した折、家督を継ぐ領主の椅子が二番目の兄の頭上を飛び越えて、末子ダドリーまで一気に行ってしまったのである。

「でもお、そんなこと、あたしに言われても……！」

エレーンはげんなり額をつかむ。「あんのバ力！ 一体どこほつつき歩いてんのよ！ この一大事に！」

嘆息と舌打ちで罵って、キッと執事に顔をあげた。

「帰って頂きなさい」

きよとんと執事は瞬いた。

「……は？　では、居留守を使う、と仰せになるのです？」

「だあって、あたしが勝手に面会する訳にはいかないじゃない」

エレーンは不敵に笑って腕を組む。「領主は不在、居なけりゃ居ないで致し方なし！」

もちろん本音は「厄介事はご免」である。そう、降りかかる火の粉は、断固速やかに振り払うべし。執事はおろおろ扉を見る。「し、しかし、使者はもう、すぐそこまで——」

「あー、具合悪るっ！」

「は？（||どこが？）」

くるりとエレーンを振り返り、あからさまに疑惑の眼差し。胡散臭げな執事の顔には（ピンピンしてるじゃねーかよおい！）とのもっともな反論が書いてある。エレーンはやおら俯いて、己の腹をぺちぺち叩く。

「あらやだ！　そーいえば、おなかの調子も！——んまあ！　あたしったらオナカが痛いわ？　今迄すーっかり忘れてたけど、そういえば今朝から、ずーっとおなか痛かったのよねー。——あら、やだ、たーいへん！　もう今にも割れそうだわあ！」

「それはそれは（||割れるー？　腹がー？）」

老執事は冷ややかに燕尾服の腕を組む。おほほ、とエレーンは頬に手を当て、ドレスの脇を引っつかんだ。

「これにて、わたくしは休みます。具合が悪くて伏せております故、使者にはそうお伝えしてね。万事粗相のないように」

「ほう？　良い根性でございますな。では、この爺一人に押し付けて、ご自分だけお逃げになると？」

執事は口を尖らせて、主人の意向を正確に意識。エレーンはそそくさ出口へ向かった。

「奥様っ！」

「んじゃ、爺。後はよろしく頼んだわよん？」

こんな所に長居は無用。さっさと、どこかへズラかるべし。そう、

逃げるが勝ちってものである。そんな厄介事を背負い込むなんぞ、まったくもって言語道断。扉のドアノブむんずとつかみ、力任せに押し開ける。

バン——と予定外の音がした。

使者2

華美な客室中央で、傷一つない飴色の卓をさし挟んで座っていた。エレーンはぶちぶち背後を見る。そこには危ういところで難を逃れ、胸なで下ろした老執事。

（もー。なんで、あたしがこんなことをー！）

向かいには、眼窩の落ち窪んだ痩せぎすの中年男が背筋を伸ばして着席している。ディールからの正式な使者だ。その紛うことなき当人を、あろうことか元氣ハツラツぶっ飛ばしてしまったからには、引くに引けない崖っぷちである。

「さて、早速でございますが」

簡単な口上を述べ終わり、使者は早々に切り出した。

「我が主より預かりました書状にございます。ご領主様ご不在の由、先ほど確かに承りましたが、なにぶん事は急を要します故、ご当主様に代わって、お受け取り願いたく」

「いいえ。受け取れませんわ」

ツン、とエレーンは横を向いた。既に喧嘩腰の態度である。だって、故郷を攻めた憎きディールの使者なのだ。歓迎などできようはずもないではないか。ラトキエの方の使者ならともかく。使者は面食らったように動きを止めて、怪訝そうに見返した。

「受け取れない？——失礼ですが、何を仰っているのか、お分かりか」

「わたくし私は領主ではございませんもの。そんな権限、どこにもござい
ませんことよ？」

手の甲頬に押し当てて、ホホ、とエレーンはお愛想笑い。虚勢を張るのも、無論これが精一杯。そう、冗談ではない。そんな危なっかしい話になんか、極力絶対関わりたくない。ディールの使者は啞然と向かいを眺めている。

「——そうですか。それでは仕方がございませんな」

意外にも、あっさり引き下がった。一度差し出した件の書状を卓の上から拾いあげ、落ち窪んだ眼窩を無表情に向ける。

「それでは大変残念ですが、私は自国^{くに}へ立ち戻り、クレストの助力は得られなかった旨、報告せざるを得ませんな。つまり、貴女^{あなた}は、我々を敵に回すと仰るのですね」

「——それは！」

「世事に疎い奥方様といえども、この状況で早馬が立てば、援軍の要請であることはお分かりになって然るべき。それを書状さえ受け取らずに追い返すというのであれば、弓引く意志は歴然です。結論を出される前に、よくよくお考え頂きたい。我々を敵に回して宜しいのですかね。奥方様の大切な領土が、明日にも消えてなくなるやも知れませんか」

「あ、あのっ！ でも、そんな——！」

急展開に戸惑いつつも、チラと壁を振り向けば、老執事は顔を強張らせ、首を横に振っている。それに小さく頷き返して、エレーンは顔を振りあげた。

「お引き取りを」

「……ほう。やはり、お心は変わらぬと？ クレストは我々に敵対すると、こう受け取って宜しいのですな」

「いいえ？ そのようなことは誰も申しておりませんわ」

怪訝そうな向かいの使者を、エレーンは微笑んで、ゆったり見据えた。

「それほど大事な書状でしたら、私などが受け取るわけには参りませんもの。クレストの意向をと仰るならば尚のこと、当家の主が戻り次第、出直して頂くのが筋というもの。そうではございませんかと？」

「ですから、急を要すると」

「そちら様のご都合でございましょう？ 私などに仰られても」
あらあらまあ、ところどころ笑い（さあ、どーよ！ これでどーよ！）と断固として目を向けた。これは予期せぬ返答であつたら

しく、使者は眉をひそめている。

エレーンは密かにほくそ笑んだ。偉そうなキツネが、なんか困っているようではないか。こうは見えても元庶民。多くの他人に揉まれつつ世の荒波を渡ってきたのだ。口先で相手をやり込める事にかけては、ちよつとばかり自信もある。

場は不気味に静まった。慇懃な穏やかさは成りを潜め、不穏な緊迫が張りつめる。

「――頑固なお方でいらっしゃる」

やがて、使者は苦笑いで表情を崩した。

「ならば、こちらもししばかり、事情を明かすのでしょうか。ああ、いえ、ここから先は、ありふれた世間話とお聞き流し下さって結構。いやなに、ちよつと小耳に挟んだ他愛のない話なのですね」

硬直した場を仕切り直すかのように前置いて、これまでの儀礼的な口調を少し親しげなものに改める。礼装の肘を卓につき、骨張った指を組み合わせ、ほんのわずか目を眇めた。

「実は先日、我々の兵が、こちらのご領主様にとってもよく似た者を捕らえて参りましたな」

「――主人が！」

愕然とエレーンは目をみはった。ここ数日の変調が、絶句した脳裏を瞬時に掠める。未だ行方の知れぬダドリー、見計らったように現れた使者、含みを持たせたこの物言い、身柄の拘束をちらつかせる脅し。ならば、使者の言う「よく似た者」とは――

「いえいえ、そうは申しておりませんよ」

使者は苦笑いで否定した。射抜くような視線は逸らさぬままに。しばし間を取り、相手の芳しい反応を確認すると、おもむろに身を乗り出した。

「恐らく、これは人違い、さもなくば誤報の類でございましょうが、しかし一応念の為、奥方様のお耳にも入れて差しあげた方が親切なわけではありませんかと、かように思案した次第でしてな。いや、まさ

か、遠い北の地のご当主様が、今頃トラビアなんぞにおられようはずもない。そうでございましょう、奥方様」

眼窩の落ち窪んだ冷やかな目で、白々しくも同意を求める。エレーンは唇を噛みしめた。「そ、そんなことして、ただで済むと思つてんの！ 仮にも一国の領主を人質にとるだなんて！」

詰問がうわずり、むなしく震える。

「はて、なんのことでございましょうか。ご非難の意味合いが分かりかねますが」

「だ、だって！ 今、あんた、ダドリーを」

「ですから、先刻から申し上げておりますでしょう。よく似た者と」憫笑さえも頬に浮かべて、使者はあくまで空惚ける。

エレーンは打ち震えて絶句した。何が起きているのか分からない。他領の主には礼節を以て接するものだ。それを犯罪人の如くに拘束するなど、まかり通る話ではない。まして正式な使者の立場というなら尚のこと。

だが、現に、これは紛れもない脅迫だった。ディールへの隷属を拒むのであれば、領主の命の保証はない、そう脅されているも同然だ。使者は今、領家の自立と領主の命——つまり、領民の命とダドリーの命の二者択一を迫っているのだ。だが、どちらか一方を選ぶことは即ち、残る一方をこの使者に、ディールに差し出すことに他ならない。進退窮まり、エレーンは奥歯を食いしぼる。「——一体、あたしにどうしろと」

「おや、急に聞き分けが良くなりましたな。初めからそうして素直に聞いておけば宜しいものを」

哀れむように小さく嘲笑い、使者は書状を差し出した。

「奥方様には、当家への援軍をご検討頂きたい。こちらのご当主様は、しばらくお戻りにはならぬようですし」

向かいの顔を睨みつけ、エレーンは卓の下で拳を握る。目の前が真っ暗になりそうだ。クレスト領家の命運が思わぬ転落を始めている。だが、食い止めようにも術がない。

何事か打ち明けるかのように、使者が卓に乗り出した。「我々は兵が欲しいのです。それも、ちっぽけな農民の寄せ集めなどではない。戦地シャンバールでさえ第一線で通用する、遊民どもの精鋭が」

「……ゆうみん、の？」

思わぬ名称に面食らい、エレーンは啞然と向かいを見る。

「ええ、遊民の」

苦々しい口調で念押しし、使者はハンカチで口元を押さえた。その名を口にするのも汚らわしいとでもいうように。甲高く掠れたしわがれ声で、使者はゆったり言葉を紡ぐ。

「クレストには無論、民兵もご提供頂く。奥方様もご存知でしょうが、我々の領土トラビアは隣国と境を接しておる故、国境防衛のお役目を、国王より仰せつかっておりますのでな。商都に軍を留めていては守備に支障をきたしてしまう。よって、今、我々は、一人でも多くの兵を必要としているのですよ。しかし、今日こうして伺ったのは、何もそれだけが理由ではない」

慇懃無礼な物言いの底に、厚かましい威圧が見え隠れする。儀礼の仮面を脱ぎ捨てたようだ。これが掛け値なしの素の態度、弱小領家クレストに対する、ありのままの評価というわけなのだ。使者が蔑むように目を向けた。

「そろそろ決着をつけようと思うのですよ。あの賤民どもの手にかかれば、商都陥落などは容易いはず。如何なしぶといラトキエといえども応じぬわけには参りますまい。もったもそこは、ならず者の集団のこと、どこの家中にも伝^{つて}などというものがあろうはずもない。あろうはずもないが、しかし、ここクレストであれば、そうした事情も別物のはず」

声を一段と低くして、耳打ちするように顔を寄せる。「おありになるのでしょうか？ 特別な伝が。奥方様におかれましては、是非ともそちらの方面で、ご尽力を賜りたい」

エレーンは戸惑った。話がさっぱり飲み込めない。

遊民というのは、どき回りの旅芸人を指す蔑称だ。どこの国籍も

持たない彼らは、歌や軽業等の華麗な芸妓を披露しながら、幌馬車一つで各地を転々と放浪する。歌ったり、踊ったり、芝居をしたり、道化を演じて笑わせたり、そんな芸事畑の旅芸人を、何故、戦に駆り出そうとするのか、まず、そこからして見当もつかない。まさか、兵を慰労する為でもないだろう。

そもそも、この「遊民」はいささか毛色が変わっている。彼らは混血児の集まりで、異国民との混血は、一般に嫌われる風潮がある。その為、彼らは市民より一段低く見られがちだ。彼らの方でも舞台を降りれば、群れに部外者を近付けない。市民と遊民、両者の間は、冷たくよそよしく隔たっている。そんな排他的な存在に、特別な伝など、あろうはずもないのだ。

「……何故、私などに手配できると思うのです？ 何か勘違いをされているのでは」

哀れむような失笑で、使者は笑った。

「おやおや、あなたは何も知らされてはいないらしい。クレストと賤民どもとの親密なる関係を」

「でも、そんな話、あたしは何も」

「遊民どもにお会いになれば、それはすぐにも、お分かりになること。クレストの頼みとあらば、連中も嫌とは言いますまい。ともあれ」

言葉をきって改めて見据え、ディールの使者は淡々と、だが、威圧的に話を締めた。

「本来であれば、一刻の猶予もないところですが、急な話で驚かれたことでしょう。これはクレストの今後を左右する大切なお話ですからな。奥方様におかれましては、よくよくご検討頂いて、返事については明日にでも、改めて伺うことと致しましょう」

使者3

「ねーちよつとさー、無責任じゃないの？ 今の態度」

エレーンはぷりぷり、不貞腐った腕組みで歩いていった。弱きを助け、悪しきを挫く正義の味方お巡りさんに、いそいそ相談に行ったのだが、あっさり突っぱねられたのである。あんなに丁重にお願いしたのに。いわく

『あのねー。あんたの街の善良な市民が、こうして目の前で困っているのよ。なのに、なんにもしないで追い出す気い？』

相手の返答はこうである。

『しかし、奥方様は、もう、市民じゃありませんよね』

更には「出動の裁可なし」と言い張られ、つまりは「あんたには警邏を動かす権限はないよ」と突っぱねられて、体良く押し付ける事にまんまと失敗したのである。詰め所で散々主張された通り、彼ら警邏のお仕事は「街の治安を守ることであって、断じて戦をすることではない」のである。

隣を歩く老執事が、ちら、と呆れ顔で盗み見た。「奥様と良い勝負でございますな。そもそも、この話を突っぱねたのは奥様ですぞ」

「なによおう、あれは爺じいがよせて言ったから」

「はて。かようなことを、いつ申しましたか」

「首振って合図したじゃない！」

「あ、いや、あの時はちよつとこう、首の周りが痒かったものですから」

(……このおー！)

エレーンはファイティングポーズで拳固を握る。醜い争いってものである。

「ここはやはり、グレッグ様にご相談なさるべきでしょうな」

燕尾服の腕を組み、執事はやおら頷いた。「使者とのやり取りを

包み隠さずお話し、こうした場合の指示を乞うのです。チェスター家を継いだとはいえ、グレッグ様もクレスト公家のお血筋なれば、知らん顔もできますまいて。まして奥様自らお訪ねになれば、会わぬわけにも参りますまい」

「ナイス！ 爺！」

パンと両手を打ち鳴らし、エレーンはほくほく頷いた。

「そうよね？　いくら（意地悪な）お義兄様だって、いつまでもすっ呆けてるはずはないわよね？　我がままな子供^{ガキ}じゃあるまいし。うん！　それいいわ！　それいきましょ！」

元より異議など、あろうはずもないのだ。こんな分不相応に巨大な重荷は、さっさと下ろして清々したい。足取りも軽くほくほくと、チェスター候の屋敷へと向かった。

チェスター候は、当地の貴族で構成される「ノースカレリア貴族院」議員の要職にある。つまりは領家の要諦だ。政務をとる立場なら、こんな名ばかりの奥方様より、よほど適任というものではないか。むしろ任せて然るべき！

ところがしかし、

「申し訳ございません。旦那様はご不在です」

対応に出向いた黒服の執事が、冷たく慇懃に頭を下げる。エレーンは苛々爪を噛んだ。

「どこへ行つたの、こんな時に！　一刻を争う緊急事態なのよ。捜して連れてきてちょうだい！」

「なんでも、商都の状態が心配なので、様子を見に行かれるとかで――」

エレーンは愕然と絶句した。つまり、それって、

――まだ、そこいらにいるってわけだ。

拗ねてしまったお義兄様は、子供より質が悪いのだった。屋敷の奥深くへとお隠れあそばしてしまつたらしく、呼ぼうが脅そうが出てきやしない。そして「執事」とは即ち、アポなしの客を追い払うプロフェッショナルの別名である。

執事にゴネてもどうにもならず、結局にべもなく門前払い。敵はどうやら意地悪く、高みの見物を決め込むつもりでいるらしい。

赤く染まり始めた夕刻の道を、エレーンとはとぼとぼ引き返していた。まさか見捨てられるとは思わなかった。気に入られていないのは知っていたが、そこは身内のことなのだ。なんだかんだ言ったって、最後には力になってくれる、そうとばかりに思っていたのに。

既に万策尽きていた。これ以上の手段など、もう思い浮びそうにもない。いや、そもそもが無理な話なのだ。一人でどうにかしろったって。けれど相談しようにも、この土地には来たばかりで、知り合いさえも碌にいない。ならば一体どうしたらいい――。

気力尽き果て、道の真ん中でしゃがみ込む。エレーンは虚ろに膝を抱えた。通りすがりの数人が、怪訝そうに避けて行く。身形が市民のそれではない、あまり見かけぬ荒んだ風体。各地から人・物共に集中する商都カレリアの裏通りで、ああした身形の集団が歩いていくのを稀に見かけることがある。あれが世に言う傭兵という類いだろうか。

彼らは通り過ぎて足を止め、不躰に眺めているようだった。道を塞がれて邪魔だったか、往來の真ん中で座り込んだ様子が不審だったか――それでもエレーンは伏せたまま、その場をわずかにも動かなかった。いや、動くことができなかった。立ちあがって立ち去ろうにも、既に精根尽き果てている。老執事が心配し、顔を覗き込んでいるようだったが、応える気力さえ失せている。見物していた一団は、やがて動いて歩み去った。

(もう、いや……)

膝を抱えた両腕に、エレーンは更に力を込めた。明日など、いつそ来なければいい。ずっとこのまま、こうしていたい。

「……あたしに、できるわけが、ないじゃないよ」

物資、財力、技量、人材、全てを取り揃えた領家の絶大な権力に、素手で立ち向かえ、と言われているようなものだ。

飽和し、拡散していく意識の中で、一点だけが冴えていた。はっ

きり分かっていることが一つだけある。それは、救いの手を差し伸べる者など、どこにもいない、という紛れもない現実だ。領邸勤めのかつてのように、物事に判断を下し、適切な指示を出し、責任をとってくれる上司などという存在は、今やどこにもいないのだ。もう頼ることはできない。

誰にも。

（あたしがなんとかしなくちゃいけない……）

絶望に目がくらんだ。途方もない重圧で窒息してしまいそうだった。他の誰でもない自分のこの手で、事態を乗り切らねばならないのだ。自分の頭で考えて、この決断を下さねばならない。そこに派生する一切を、全て引き受ける覚悟の上で。仇敵ディールに隸従するか、要請を突っぱね自立を保つか、それとも、他にも方法が――？ それを検討する為の、どんな材料があったろう。どんな選択肢があるだろう。政治方面には疎いから、判断材料は乏しかった。それでもなんとか吟味して、知恵のありったけを動員し、吹けば飛ぶような経験もフル稼働で働かせ、なんとか、より良い結論を――

「考え、ないと……」

エレーンはのろのろ立ちあがった。問題を誤魔化して遊んでいる暇は、もう、ない。

執事がおろおろ覗きこむ。ずっと傍らで気遣ってくれていたらしい。何事か話しかけているようだが、どんな慰めも耳に入らず、上の空で返事をした。

腹をくくる時がきたようだった。

決定の期限は、今夜限り。

使者4

「心はお決まりになりましたかな」

再び交渉のテーブルに着き、使者はいそいそ上機嫌で覗いた。「最早一刻の猶予もございませんのでな。昨日のお返事、しかと頂戴致したく」

相手が承諾することを、露ほども疑わぬ傲慢な顔だ。

「さあ、どうなさいました。色良いご返答を頂けるのでしょうか」

エレーンは膝に目を落とした。指先の震えが止まらない。ドレスの膝を握り締めているのは、何の変哲もない自分の手——まったく冗談みたいな話だった。こんな小さな自分のこの手に、領家の命運がかかっているというのだ。幾千幾万もの領民たちの運命を、それぞれが築く未来の全てを、自分のこの手が握っている。ついこの前まで領邸のメイドとして働いていた、見識も資質もない、ちっぽけなこの手が。

——逃げたい。

壮絶な恐怖が込みあげた。こんな場所はすぐにも逃げ出し、自分を誰も知らない所で、無関係な顔を決めこみたい。自分は他人様の運命を、まして他人の生命を顎の先で左右できるような、そんなたいそれた器ではない。領邸で寝起きはしていても、中身はただの一庶民だ。人の上に立つべく教育された生粋の貴族のダドリーたちとは、端から全く違うのだ。英気が。器量が。才腕が。

ふと、それを考えた。ならば「領家の人間」なら、ダドリーならば、どう対処するだろう。どう使者に答えるだろう。今、この場に
いる者が、ダドリー＝クレストであったなら——。

あの光景が脳裏を過ぎった。彼に詰め寄った午後の書斎が。ラトキエへの援軍を促して突っぱねられたあの時が。

「さあ、奥方様。ご返答を」

「……お引き取りを」

ピクリと使者が動きを止めた。

「——いや、申し訳ない。よく聞こえなかったのですがね」

訝しげに聞き返す。緊張に汗ばみ、強張った両手を強く強く握りしめ、エレーンは膝から顔をあげた。今度は一語一語はつきりと、クレスト領家としての意向を伝えるべく、相手を見据えてきつぱりと告げる。

「領主不在のこの折に、私の一存で兵を動かすことはできません。お引き取りを」

そう、ここにるのがダドリー＝クレストであつたなら、何を置いても領民を守る。それを最優先にしたはずだ。自分が大切にして
いるものが、それで犠牲になろうとも。捨て難いものを失うとしても。例えそれが懐かしい商都であらうとも。

今にして、ようやく分かる。彼が下した決断の意味が。一貫してはねのけ続けた領主としての言葉の重みが。同時に二つは選べない。だから彼は採ったのだ。自分の領土と領民を。何より大事な領民の暮らしと、その生命を守る為に。

彼は泣き言なんか言わなかったけれど、商都が大事でなかったはずはない。考えなかったわけがないのだ。自分が見捨てて人々のことを。ラトキエの人々の行く末を。

それでも彼は一人で決めた。どれだけ文句を言っても、人でなしと罵られても、逃げ出したりはしなかった。体が二つに引き裂かれ
そうな痛みが、決断するしかなかった苦悩が、同じ立場の今なら分かる。けれど、要請を蹴ったなら、切り捨てられたダドリーはどうなる？

暗い牢獄に繋がれて、背中を鞭で打たれるかもしれない。二度と外には出られないかもしれない。悪くすれば死んでしまうかもしれない。遠いトラビアの獄中で、誰にも看取られることもなく。でも、それでも。

珍しいものでも見るように使者はまじまじと眺めやり、戸惑ったように眉をひそめた。

「ほう。宜しいのですかな、本当に？ 結論をお出しになる前に、よくよくご再考願いたい。既に申し上げているはずです。切り札は我が手中にあると。よもや、お忘れではないでしょうな」

エレーンは無言で睨めつけた。断じて、ここで屈してはならない。
「――強情な方だ」

使者は忌々しげに舌打ちし、乗り出していた背を椅子に戻した。
「そうですか。それはまことに残念だ。ご当主様はこちらには、二度とお戻りにならぬかも知れませんが。しかし、民も災難ですな。主に見捨てられようとは！」

苛立った皮肉で脅迫し、人差し指で卓を叩く。

「本当に宜しいのですな。貴女あなたの下す判断一つで、街が火の海になるやもしれませんぞ。それでも良い、と仰るのですな」

「――で、ですから、それは！」

さすがにエレーンは口ごもった。それを持ち出されては頷けるはずがない。

「そうですか！ ならば――」

使者が痺れを切らして席を立った。落ち窪んだ眼窩で冷ややかに見下し、憎々しげに睨みつける。冷徹な色がその眼に過ぎった。

「ならば、首を洗って待っているがいい」

靴の踵を鋭く鳴らして、憤然と外套をひるがえす。

「――ちよつと待ちなさいよ」

立ち去りかけた足を止め、使者が肩越しに振り向いた。エレーンはゆっくり席を立つ。そして、剣呑に睨み据えた。

「あたしの夫にちよつとでも妙な真似をしてみなさいよ。そんなことしたら、あんた、ただじゃ済まさないわよ」

使者が鼻じらんだように顔を強張らせ、取り繕うように鼻を鳴らした。そそくさ扉に踵を返す。

重厚な扉が叩き付けられ、凄まじい音が部屋中に響いた。交渉の決裂した瞬間、売られた喧嘩をクレストが買った瞬間だった。

がらんと白けた空間に、沈黙が重く淀んでいた。場違いなほどのどかな日差しが、傍らの大窓から差しこんでいる。少し離れて見ていた執事が、おろおろしながら寄ってきた。

「お、奥方様。どうしたら！」

冷たく閉じられたドアに目をやり、やきもき手を握りしめる。「あの様子では、ディールはやはり本気なのでしょうな。我々は従うべきだったのでしょうか」

「いいえ」

エレーンは静かに、だが、きっぱり首を横に振った。

「クレストはラトキエの要請にも応えなかったのよ。それを今更、ディールの書状を受け取るわけにはいかないわ」

「ですが奥様。このままでは旦那様の身が」

「大丈夫。きっと殺されはしない。——大丈夫」

エレーンは首を振って、目を閉じた。癖っ毛の彼の、屈託のない笑顔が蘇る。こうなってしまった以上、彼は二度と戻ることができないかも知れない。それでも、そうするより他ないのなら。あの場にいたのが彼ならば、そう答えたというのなら。

領主の代理として赴いた以上、その意に反することはできなかった。領主の意向を伝える事こそ、交渉のテーブルに着く者の、唯一にして重大なる役目だ。

「大丈夫——きっと大丈夫！」

微かに灯る希望を唱えて、エレーンは自らに言い聞かせた。「あの人たちは知っているもの、ダドリーの身分を。だから、きっと殺したりしない。ダドリーだけは最後まで」

暗示を紡ぐ声が震える。

「ラトキエが勝つまで我慢するのよ。それなら時間は、まだ残されているはずよ」

「ですが万一、ラトキエが敗れば、その時は」

エレーンは拳を握って沈黙した。足元の一点を睨みつけ、奥歯を強く噛みしめる。床に俯いた目の端で、窓の外の梢がゆれた。昼下

がりの領邸は、穏やかな静謐に包まれている。

「——でもね、あの人は褒めてくれると思うの」

なんとか言葉を紡ぎだし、エレーンは強張った頬をようやくゆるめた。

「よくやったって、笑って褒めてくれると思うの。だ、だから、あたしは、しっかり留守番してないと——」

声が震えて、その先は言葉にならなかった。執事は黙って聞いている。目を逸らした横顔は居たたまれない面持ちだ。こみあげた涙を腕でぬぐって、エレーンは気を取り直して微笑みかけた。

「ね、爺。あの人が領民は出さないと決めたのよ。なのに、あたしが勝手に反することはできないわ」

「しかし奥様。それでは旦那様の身が」

「あたしはダドリーに従うわ」

きっぱりエレーンは断言した。

「ダドの決定に、あたしは従う。彼の目を信じるわ。ダドリーはクレストは、あたしを選んだ最高の夫よ。ダドの言うことに間違いはない」

執事は深く嘆息した。

「左様でございますか。ならば、爺にはもう、何も申し上げることはございません」

ゆるゆる首を振っている。老いた胸中を占める想いは諦めだろうか。絶望だろうか。彼とてこの渦中にいるのだ。明日をも知れぬ不穏な渦中に。

「そ、それにしても——」

それに気づいて居たたまれなくなり、エレーンは慌てて話題を変えた。

「今の使者、妙なことを言っていたわね。あれはどういう意味かしら。遊民の精鋭を手配しろ、だなんて」

「本当でございますとも！　　どういいう見でおるのやら！」

意気消沈していた執事が、ここぞとばかりに大喝一声、薄い頭を

振りあげた。使者の叩き付けた大きな扉を、腕組みでぷりぷり睨めつける。本人がいないと威勢が良い。

「……遊民、か」

元の椅子に座りこみ、エレーンは額に手を置いた。新参者の自分には、彼我の間の因縁は、何のことやら見当もつかない。だが、あまで執拗にこだわったところをみると、その意味は決して小さくない。

「まったく！ 珍妙なことを言うものですな！ よりにもよって遊民どもを手配せよとは！ あのいかがわしい連中が大挙して集う場所へなど、のこのこ出向いてごらんなさい。何をされるか知れたものでは——」

「さ、爺。行くわよ」

ガタンと椅子の脚を鳴らして、エレーンは席を立ちあがる。きょとん、と執事が顔を見た。「はて。どこへでございますかな」

「決まってるでしょ。デュナン草原、遊民たちの天幕群へよ」

「え……えええっ！」

そう、使者がそうまで欲するならば、彼らが切り札になる筈だ。最悪の事態を覆す、最後の強力な切り札に。

交渉 1

交渉

通されたのは、意外にも小奇麗な応接室だった。珍しい模様の瀟洒な皿が飾り棚の上に立てかけられ、精密な彫りの調度品が品良くさりげなく飾ってある。

デュナン草原、遊民たちの天幕群。見張りの立つ入口で「一番偉い人を」と頼みこみ、来意に応えて出てきた彼は、遊民たちを統括する「統領の代理」と立場を名乗った。彼の名前はデジデリオ、統領の実弟ということだ。

ソファアーに脚を組んだ統領代理の後ろには、彼の護衛であるらしき目つきの鋭い五人の男が隙なく並び立っている。着こんだ革ジャンに暗色のズボン、頑丈そうな編み上げ靴、そして、年季の入った上着の下には短剣の柄が見えている。皆、堀が深く精悍だ。カレリア人の顔立ちではない。隣国の傭兵でも雇っているのだろうか。

向かいのソファアーの青年は、涼やかな目を向けている。手入れの行き届いたウェーブの長髪、一目で高価とわかる服。若く端麗なその顔は、そつなく落ち着きを払っている。

「さて、ご用の向きを伺いましょうか。こんなむさくるしい所まで、公爵夫人直々にご足労頂いたのですから」

「——あ、はいっ！」

はたと我に返って赤面し、エレーンはあたふたうつむいた。向かいのあまりの美麗さに、うっかり見とれていたらしい。統領代理はゆったり目を向け、話を切り出すのを待っている。込みあげる緊張に唾を飲み、エレーンは顔を振りあげた。「た、助けて欲しいの！」

あたし達を！」

「助ける？」

訝しげに目を細め、統領代理は復唱する。

「え、ええ！ 実は昨日、屋敷にディールの使者がきて——」

統領代理は腕を組み、言葉を挟まず聞いている。相槌を打つでもなければ、促すでもない。反応のなさにやきもきしながら、しどろもどろで続けていると、途中で小さく嘆息した。やはり、あからさまに気のない態度だ。

こちらの事情は話し終えたが、彼は口をきこうとしない。空気がよどんだような応接室に、時間だけが流れていく。

「——あ、あの！」

「お引き取り願いますようか」

向かいがおもむろに席を立った。素っ気ない返事に驚いて、エレーンは慌てて食い下がる。「お、お願いします！ だって、あなた達しか頼る所は——」

「無理ですよ。残念ですが、私たちはご期待に添えません」

「待って！ ディールの使者が言ったの！ あなた達とクレストは親密だって！ あれは一体どういう意味？」

統領代理は足を止め、肩越しに護衛を一瞥すると、軽くそちらに手を振った。

「ああ、お客様はお帰りだ。誰か送ってさしあげて」

エレーンとはとぼとぼ、街の大通りを歩いていた。一度は領邸に戻りもしたが、いてもたってもいられずに、再び抜け出し、散歩に出たのだ。

「……あたし、一体どうしたら」

途方に暮れて溜息をついた。観光客と思しき親子が、雑談しながら行き過ぎる。寂れた田舎には珍しく、街は多くの人で賑わっていた。年に一度の豊穰祭、一月もの長期にわたるその開催期であるからだ。

ノースカレリアの豊穰祭は、他都市のそれとは比べ物にならぬ程、華美で大掛かりなことで知られている。それには祭の主役ともいえるべき遊民たちの存在が大きい。

観光客は「農作物の実りに感謝し、翌年の豊作を祈願する」という祭本来の主旨に賛同するというよりはむしろ、祭に彩りを添える踊り子たちの優美な舞いや、秀逸な芸を披露する芸妓団の華麗な催し物の方を楽しみに、この大陸北端の地を訪れる。というのも、遊民たちの興行は通常、家財道具を積んだ荷馬車一つで気ままに各地を訪れる「どさ回り」が主なので、数十もの芸妓団が一同に会するこうした機会は、実に珍しいことだからだ。よって、毎年この時期、大陸北端のこの街には、世に聞こえた有名な祭を一目見ようと観光客が押し寄せる。この一大イベントに、街中の宿という宿は、全国からの観光客で連日満室御礼となる。無論、街中の商店にとっても唯一無二の書き入れ時だ。

ノースカレリアは観光収入に頼った街だ。華やかなりし港湾都市の昔には、飛ぶ鳥落とす勢いだったが、内海の氾濫で廃港となり、以降すっかり落ちぶれてしまった。今では観光客の落とす幾ばくかの金で暮らしが成り立っている側面がある。そうなれば畢竟、祭の準備には街を上げて入念に取り組み、壊れた外壁や人目につく歩道等はすべからず整備、修繕される。開催期には商店も、石畳の歩道にまで商品をぎっしり押し並べ、売り込みも盛んに行なわれる。親子連れや恋人たちが通りを行き交い、ひと時、街は活況を呈する。

「……豊穰祭、か」

通行人を見回して、エレーンはそっと嘆息した。

北の街の石畳を、爽やかな北方特有の心地良い日差しが照らしていた。街をぶらつくどの顔も、肩の力を抜いてのんびりしている。店の前を掃く前掛けをした老婦人、祭の準備に追われ、忙しげな店主、寛いだ顔で店先を冷やかす観光客。だが、祭に浮き立つこの街も、あと数日もしたならば――。

期限は刻々と近づいてくる。協力者は見つからない。そればかり

か、のん気にぶらつく人たちは、今こうしている間にも、ディールの軍が着々と、この地に向かってのことさえ知らないのだ。

なんとかせねばならなかった。ディールの要請を突っぱねたからには、難局を自力で乗り切らねばならなかった。どんな手段を使っても。だが、こちらの味方は一人としていない。警邏は端から耳を貸さず、身内に疎まれて居留守を使われ、頼みの綱の遊民たちにも、あっさり協力を拒まれる――。

整備された石畳が、いやに白々しく眩しかった。寒いような気候ではないのに、抱き締めた体が震えていた。街のつつがない喧騒が動かぬ体を包みこみ、四方八方から責め立てるように迫りくる。穏やかで平和なこの街を、この手で壊してしまうのか――

「どうしたい。新婚さんがシケた面して。ん？」

声を怪訝に振り向けば、大きな茶色の紙袋を抱えて、中年の夫妻が立っていた。

煉瓦を貼った建物の壁が、午後の日差しを浴びていた。遊民たちの天幕群、その最奥にある建造物だ。舞い戻った館の壁を、エレインは固い決意で振り仰ぐ。街で再会した夫妻と共に。

夫妻は「どくろ亭」という宿屋の主である。宿の所在地は、街から東に伸びる街道をずっと行った遠方なのだが、物品の買い出しの為、ノースカレリアに来たらしい。亭主がセヴィラン、女将がビビ。二年前、休暇でこの地を訪れたエレインは、「どくろ亭」を借りきって長逗留していた仲間たちと毎日のように遊んでいた為、階下にある飲食店は彼らの溜まり場となっていた。それで、宿の主とも家族同然の顔馴染みなのだ。いわば夫妻は、行きつけの店の亭主と女将といったところ。

ひょんなところで気心知れた顔に会い、エレインは思わず泣きついた。夫妻は事態の経緯と窮地を知るや、加勢することを請け負った。それで早速、天幕群に舞い戻り、見張りの制止を振り切って、先刻、統領代理と面会した、敷地最奥の建物の前まで、半ば強引に

押し通ってきたのだ。

日差しを遮る館内は、ひんやりとして涼しかった。閑散として誰もいない。エレーン一行は入口を潜り、先程通された応接室を目指して廊下を歩く。

「どこへ行く」

唐突に声がかかった。見れば、前方右手の薄暗い壁に、男が一人腕を組んでもたれている。薄茶の直毛を腰まで伸ばした、整った顔立ちの若い男だ。細身の体に着古した革ジャンをはおり、中には黒のランニング、綿素材の暗色のパンツに、黒い編み上げ靴を履いている。先刻、応接室で見た護衛と似たような風体だ。

肩の長髪をしなやかに揺らして、男が背を引き起こした。静かな廊下に硬い靴音を響かせて、おもむろにこちらに近づいてくる。目の前まで来て足を止め、亭主の腕を無造作につかんだ。

「——なんだ。放せよ。俺たちはこの先に用があるんだ」

亭主はうるさそうに舌打ちした。だが、長髪は手を放さない。亭主の声には陰があり、右眉にある刀傷とも相まって、そうとう迫力があつたはずだが、怯んだ様子はまるでない。それにいささか苛立つたらしく、亭主が剣呑に見返した。「やろうってのかよ。言っておくが、女みたいな面でも容赦はしないぜ。生憎こっちも急用なんぞでな」

「ここから先は、立ち入り禁止だ」

言うなり、長髪が亭主の腕をねじ上げた。

「——よ、よせっ！ おい！」

前のめりに体を折って、亭主はうめく。ぎりぎり腕をひねり上げつつ、長髪は表情一つ変えるでもない。その手には相当な力がこめられているらしく、亭主の額に脂汗が浮かんだ。「よせ、腕が折れる——おい、放せ！ よせったら！」

「や、やめて！ その手をお放しよ！ デジデリオはあたしらの友達なんだよっ！」

女将が慌てて取りついた。長髪の傭兵が怪訝そうに眉をひそめた。

女将の取り成しをししばし眺めて、ようやくその手を突き放す。ぶつきらばうに顎をしゃくった。「あんたらが友人だという証拠は」

女将は面食らってたじろいだ。「そ、そんなものはないよ。でも、デジデリオは友達で、いつも、うちの店に入り浸って——」

「お友達、ね」

小馬鹿にしたように鼻先で嘲笑い、長髪は女将を一瞥し、いわくありげに目をすがめた。「バード風情が友達か。あの人らしいが。

——まあ、いい」

廊下の先を顎で指し、薄茶の髪をひるがえす。ついて来い、と言っているらしい。

はっ、とエレーン是我に返り、うずくまった亭主に駆け寄った。

「お、おじさん！ 腕、大丈夫？」

「——お、おつかしいな。あんな女みたいな奴に、この俺が？」

ひねられた腕をさすりつつ、亭主は首をひねっている。ちら、と女将が目を向けて、腕を組んで嘆息した。「腕が落ちたんじゃないのかい？ あんたもヤキが回ったね」

すっかり面目を潰されて、亭主はばつ悪そうに目をそらした。苦々しげな舌打ちで、長髪の背中を睨めつける。

「なんて野郎だ女男が！ デジデリオの奴、部下の躰けがなってねえぜ。会ったら文句を言ってやる。ま、それはそうと——」

傍らのエレーンを振り返り、長髪に向けて促すように顎をしゃくする。

「案内する気はあるようだな。さ、行こうか、奥方様」

長髪の傭兵は、廊下の奥へと歩いていった。もう、こちらを振り向きもしない。はぐれてはならじ、と三人は急いで後を追った。

交渉2

「丁重にお断りしたはずだがな。俺たちは力になれないと」

亭主セヴィランにつめ寄られ、統領代理は面倒そうに溜息をついた。彼の言い分はこうだった。

「俺たちは所詮よそ者だ。どこが土地を治めようが、俺たちには関係ないね」

交渉は難航した。亭主が働きかけてはくれたのだが、統領代理は頑として、やはり首を縦には振らない。

今回案内されたのは、先ほどの小奇麗な応接室ではなく、紫煙がうつすら立ちこめる大勢が詰めた部屋だった。乱雑に置かれた丸卓と椅子に、数十人もの傭兵が荒んだ様子でたむろしている。ある者は卓に土足のままで足を投げ、ある者はもたれた椅子に腕をかけ、又ある者は隣の者と雑談し――森の底を這う白霧のように低く煙るざわめきは、さながら実戦部隊の待機所といった趣きだ。そのいずれもが物珍しげに目をすがめ、押しかけてきた珍客に冷やかしの視線を向けている。

馴染みのない、ざらついた物々しさに、エレーンは臆し、戸惑った。ここへは「遊民」に助力を乞いにきたはずだった。だが、ここにいる彼らは「遊民」のイメージとはほど遠い。確かに道中、ここに来るまでの建物の外には、長髪をくくった道化師だの、薄絹の衣装の踊り子だの、看板や太鼓を運搬する軽い風体の若者だのと、いかにもそれらしい「遊民」たちが大勢たむろしていたのだが。

今も窓ガラスの向こうでは、いわゆる「遊民」の天幕群が気だるく西日を浴びている。そこにひしめく面々も、日々に倦んだような無表情で、怠惰の衣をまとっている。この建物の中だけが異質だった。建物の内と外では異なる空気が流れている、そんな感じた。

案内してきた長髪の男は、窓辺でたむろしていた一団にまじった。

陽のあたる窓辺にいるためか、目を引く蓬髪のたくましい男が一人まじっているからか、そこだけ他から浮いて見える。

亭主の説得は続いている。だが、旗色は依然として思わしくない。軍は刻々と近づいてくる——エレーンはたまらず割りこんだ。だが、「ま、確かに役に立つ戦力だよな、俺たちは。街でのうのうとしているボンクラなども足元にも及ばねえくらいにだ。実際、シャンバールの戦場なんかじゃ、俺らはいつでも引っ張りだこだぜ。なんでかわかるか奥方様。俺たちなら大抵の兵はねじ伏せられるし、例え討ち死にしたところで、後腐れがねえからさ。要するに使い捨てにするには都合がいい駒だって話だ」

話のオチに苦笑いしながら、傭兵たちは白けた顔で卓に戻る。おのおの再び雑談を始めた。明らかに気のない素振りだ。だが、そっぽを向かれたら一巻の終わり。

エレーンは焦燥に駆られて考えを巡らせ、ふと、あの話に行きついた。以前ダドリーから聞いた話、街と「遊民」との関係に。彼らに視線を振りむけた。

「ねえ、聞いたわ。ここが——このノースカレリアが、あなた達の故郷だって！」

室内のざわめきがピタリとやみ、部屋が唐突に静まり返った。馬鹿話をしてせせら笑っていた傭兵たちが、眉をひそめて振り返る。亭主が驚いた顔で振りむいた。「お、おい！ あんた、その話は——！」

「だったら土地の人も同然じゃない。同じ故郷を持つ仲間じゃない！　ね、みんな。そうでしょう」

慌てた制止を振りきって、エレーンは強引に言い募る。

成り行きを見守っていたどくろ亭の女将が、たまりかねたように隣の亭主と目を合わせた。騒がしかった今しがたとは打って変わり、室内は不気味に静まっている。全ての者が動きを止め、空気がピンと張りつめている。

予期せず皆から注視され、エレーンは豹変ぶりにたじろいだ。雲

行きが奇妙だったが、やっと食らいついた感触があるのだ。ここで好機をのがすわけにはいかない。ためらいを思いきり、勢いこんで畳みかけた。

「ね？ だったら、少しくらい力を貸してくれても——！」

「——仲間！ 仲間、ね」

冷やかな声が返ってきた。茶化するような反応に、エレーンは面食らって振り返る。声の主は中央に陣取った中年の傭兵だ。彼は椅子の背にふんぞり返り、皮肉な笑みで頬をゆがめた。

「いいねえ。いい響きだ。そんな偽善的な言葉を聞くと、背筋がゾクゾクしてくるぜ」

くつくつ笑って腕を組み、大仰な仕草で感慨深げにうなずいている。顔を上げざま、鋭く視線を振り向けた。

「だったら、少しばかり毛並みが変わっていただけで、街から追いつめるのが仲間なのかよ！ よってたかって迫害するのが、仲間のすることだってのかよ！——あーあー、ありがたくなって泣けてくるぜ。てめえらで勝手に追い出しておいて、そっちの都合のいい時にだけ、仲間扱いして下さるたあなあ！」

「——で、でもね、今は緊急事態よ」

突然の剣幕にたじろぎながらも、エレーンも必死で食い下がる。

「ご、ごめん。あたし、そっちの話はよくわかんないけど、でも、このままにしたら、ディールが街に攻めてきて、街そのものがなくなっちゃうわ。だからね、昔の遺恨はおいという——あ、ううん、これを機にいつそ水に流しましょうよ。だって、今こそ一致団結して各自の役割を果たす時よ。皆が一つにならないと、危機は乗り越えられないわ。みんなで街を守——」

「まったく大したペテン師だ！ ペラペラとよく回る口だぜ」

「聞いて！ あたしは不在の夫から、市民の命を預かっているの。街を荒らされるわけにはいかないの。だからお願い、力を貸して！」

「やれやれ。とんだ茶番だぜ。あんたの旦那も勝手放題ぬかしていたが、そんなに下手な交渉はしなかったぜ」

ギロリと憎々しげに中年が凄んだ。

「他人をコケにするのも、たいがいにしろや。とっとと帰りな。怪我しねえ内によ。やっぱり所詮はメイドあがり、高がしれてるってことだよな」

「——それが、なに」

むっ、とエレーンは顔をあげた。冷ややかに見ている傭兵たちに、やおら視線を巡らせる。

「そうよ、あたしはメイドあがりよ。だったら、それがなんだってわけ？ あんた達が遊民だから、だから盾に使うんだろうですって？ ——はん！ 冗談じゃないわ！ 甘ったことぬかしてんじやないわよ！」

叩き返すように啖呵をきられて、椅子にふんぞり返った中年が、いや、部屋にたむろす傭兵全てが眉をひそめて見返した。エレーンは真っ向から睨めつける。

「あたしは身内と思えばこそ、こうしてお願いにきているの！ こんなせっぱつまった大事な時に、信用できない赤の他人に助力を求める馬鹿はいないわ！」

「——こ、このアマ、調子に乗りやがって！」

別の拳がわなわな震える。顔を振りあげ、男が吠えた。

「適当なことをぬかしやがって！ どうせ、この場だけ丸め込みりやいって肚はらなんだろうが！ 見え透いてんだよ、てめえの薄汚ねえ魂胆は！」

「いつまで駄々をこねてりや気が済むの」

「——あ？」

「いつまで拗ねてりや気が済むのかって訊いてんのよ！ そんなこと言っていじけていたら、いつまでたっても、どこにも道なんか拓けやしないわ！」

男が拳を握りしめた。「小娘風情が偉そうに！ 土地を追われた苦労なんぞ、これっぽっちも知らねえくせに——どうせ俺らは遊民なんだよ！ てめえらが蔑んで追い出した——」

「なんだってのよ！　それが！」

それに倍する声量で、エレーンはぴしゃりと言い放った。一同の顔に目を据える。

「いつまで泣きごと言ってるつもり！　甘ったれてんじゃないわよ！　逃げんじゃないわよ！　人の存在に貴賤なんかないわ！」

窓から、そよ風が吹きこんだ。

大部屋の卓のこここで、紫煙だけがゆれている。壁一面の腰窓から、夏陽がじんわり降りそそぎ、白茶けた木板の床に、窓格子の影が落ちてゐる。

「——そんなおとぎ話は、そこらのガキにでも言っちゃれや。その手の奇麗事に興味はねえよ」

やがて、窓際に据えた卓の男が、目をそらして吐き捨てた。思わぬ反応にいささか慌て、エレーンは男に目を向ける。「き、奇麗事なんかじゃ——」

「もし！」

男が声を荒げて遮った。

「もし、あんたの言うように、人に貴賤がないんなら、どうして街の連中は、俺たちの仲間を追い出した。事あるごとに”あいの子”と蔑む！　そんな寝言は聞きたくもないね。俺たちはもう——」

「そんなことは言わせない」

エレーンの低い呟きに、室内全ての人間が訝しげに目を向ける。

エレーンは決然と畳みかけた。

「誰にも、そんなこと言わせない！　何があっても、あたしが守るわ！」

一同が拍子抜けして見返した。

「……守るだア？」

やがて、哀れむように室内がざわめき、卓の方々から失笑が漏れる。

「そいつはいい。そりゃあ、頼もしい限りだな。あんたがその手で俺らを守ってくれるってか」

まぜっ返す物言いが、不意に激しい憤りに変わった。

「ふざけるな！ 小娘風情に一体何ができるってんだ！ そもそも、なんだって、無関係な他人が偉そうに——！」

「あんた達のこととはあたしを守る！ 約束するわ！」

罵声に更なる大声で、エレーンも負けじと言い募った。

「約束するわ！ あたし達は家族よっ！」

シン、と大部屋が静まり返った。

傭兵たちは腑に落ちない面持ちで、互いの顔を盗み見ている。かんばんしからぬ反応だ。エレーンは焦れて拳を握った。

「そうよ家族よ！———なによ、なんか文句あるっ？ あたしなんかが家族じゃ嫌だったのっ！」

手近な胸倉むんずとつかんで、ぶんぶん力任せに揺さぶってみる。こうなりゃ破れかぶれだ。

つめ寄られた若い男が、勢いに押されて立ちあがった。たじろいだような困った顔つき。彼の反応を見るまでもなく、熱意が空回りしているのは明らかだった。声が全く届いていない——砂を噛むような虚しい思いで、エレーンは声を震わせ、うつむいた。「家族になってよ。お願い、あたしを助けてよ……お願い、だから……」

すがった男は辟易と、後ろ頭を掻いている。統領代理はソファーに片肘をついて眺めていたが、困った男に指示を乞われ、溜息まじりに立ちあがった。

「兵は出せない。お引き取り願ひましょうか」

「———どうしてよ！」

男をすぐさま放り出し、エレーンは統領代理へ向かう。

「こんなに言ってもわかんないの！ このわからんちんっ！」

黙って見ていたどくろ亭の主が、見かねたように腕を組んだ。「おい、なんとかしてやれよ。時間がないんだ。お前になら、できるだろうが」

統領代理は肩をすくめた。

「なんと言われようとも、出せるような兵はない」

「嘘をつくなよ。お前らがシャンボールで荒稼ぎしているのは、ちとら先刻承知だぜ。そもそもそれなら、ここにいるこいつらはなんだってんだ。どう見たって、本職の傭兵だろうが」

「いや、本当じゃないんだ。手駒はここにいるだけで、後はあらかた旦那の方に貸しちまったからな」

「旦那？」

視線で説明を促され、統領代理は嘆息した。「——これは内緒の話なんだがな」とごちるように前おいて、観念したように腕を組む。「商都に行くから兵をよこせ、と領主が突然乗りこんできてな。兵はみーんなカレリアだ」

「——ダ、ダドリーがつ！」

エレーンは瞠目して泡をくった。無論そんな話は聞いていない。失踪していたダドリーがデイルの捕虜になっていた事にも驚かされたが、よもや、そんな勇ましい真似まで、ちゃっかりしていようとは……。

統領代理は額に手をあて、つくづくというように嘆息した。

「まったく。どうしたらいいんだろうねえ。旦那はカレリアを援護に行くから兵をくれと言うし、奥方は奥方で、これからデイルに楯突くから兵を出せと言う。まったく、なんて夫婦だ、我がままな」

どくろ亭の主は談判の姿勢で腕組みしたまま、ぼかんと口をあけている。しばし、そのまま呆氣にとられ、不敵な笑いを頬に浮かべた。「へえ、お前らが領主に兵を貸してやったってのかよ。デジデリオ、お前、何を企んでいる」

「別に何も企んじやいないさ。俺たちはいつだって友好的だ、そうだろう？ 街の皆さま方と上手くやるつもりは常にあるさ」

統領代理はかったるそうに肩をすくめた。亭主は素っ気なく畳みかける。「無料^{ただ}じゃないんだろ。条件は」

言葉につまったように軽口をつぐみ、統領代理は渋々亭主に目を向けた。「……《影切の森》の、居住権」

「影切の森？ あんなもの手に入れて、どうするんだ。木こりにで

もなるのかよ」

「決まっているだろ、住むんだよ。樹海を切り拓いて集落をつくって。近頃、人数が増えて手狭なんだ、色々と」

「それだけか？」

「もちろんだ」

いかにも心外そうに、統領代理はうなずいた。

「町で暮らすお前なんかじゃ、ピンとこない話だろうが、俺たちには切実でね。一つ所に定住できるってだけでも、ありがたいさ。病人や年寄りに移動生活は厳しいからな。まあ、そういうわけだから」
淡々と話を締めくくり、招かれざる客へと目を向ける。

「わかったろ。この有様じゃ、どうにもならない。古くからの友の頼みだ、できれば聞いてやりたいが――」

近くの席の屈強な男に顎をしゃくった。

「さ、奥方様はお帰りだ。丁重に送ってさしあげて」

指名の男が席を立った。つかつか歩いて、エレーンの左の腕をとる。ぎよっとエレーンは身を引いた。

「は、放してよっ！ 話はまだ終わってないわ！」

だが、無遠慮なその手は構わない。エレーンは暴れて身をよじり、卓の面々を指でさす。「いいわよ、ここにいる人たちで！ この人たち、あたしに貸してよ！ ほ、ほら、いっぱいいるし、みんな、とっても強そうじゃない！」

さっさと追い出せ、と統領代理が手を振った。両手を振り回して抵抗するも、男にはまるで歯が立たない。今にもつまみ出されてしまいそうだ。

「おい！ 手荒な真似はよせ！」

亭主が慌てて、制止すべく手を伸ばす。卓にいていた傭兵たちが機敏な動作で立ちあがった。客の元へと大股で群がり、二人はまたたく間に一団に吞まれる。

二人は懸命に抗った。だが、屈強な体で壁を作られ、なだめるように押し返される。吞まれた渦中で揉まれつつ、亭主が苛立たしげ

に目を向けた。

「おい！ デジデリオ！ こいつらをやめさせろよ！」

揉みあい始めた人垣に、女将が驚いて駆け寄った。「こら！ あんたたち！ うちの人に何するんだい！ さっさと放さないと承知しないよっ！」

ねめつけて威嚇し、服をつかんで力任せにひっぱり戻す。腕に取りつかれた男の一人が、うるさげに女将を引きはがした。「バード風情は引っこんでな。大人しくしないと怪我するぜ」

肩を手荒く突き飛ばす。転んだ床で尻もちをついて、女将がまなじり吊りあげた。

「何すんだい！ ロムだかなんだか知らないけど、何をしてもいいってわけじゃないんだからね！」

うるさそうに男が動いて、すぐさま女将を引っ立てた。

拘束の輪から抜け出そうと、三人それぞれに足を踏んばり、手を振り回して抵抗した。だが、元より彼らの敵ではなかった。赤子の手をひねるが如くに部屋の出口に引きずられる。

「——いくじなしっ！」

押し寄せる周囲をせわしく見まわし、歯がゆい思いでエレインは叫んだ。暴れて髪を振り乱し、せめて一同を睨めつける。

「人前に出るのがそんなに怖いのか！ 陽の当たるところに出るのがそんなに怖いのか！——ちょっと！ なんとか言いなさいよ！ いつまでそうやって殻に閉じこもっている気なの！」

「ほら、もういい加減にしときな、ねーちゃん」

無残な有様を見かねてか、エレインを引きずっていた屈強な男があやすように顔を覗いた。「もう、これで終わりにしようや。俺らだって手荒な真似はしたかねえんだよ。噛みついてても無駄だってことは、あんたにもよくわかったろう」

それは拍子抜けするほど穏やかな口調だった。だが、部屋から追い出そうとしていることには変わらない。やがて、ドアが開けられて、男たちの無造作な手が、廊下へ客を引きずり出す。

「いやよ！ あたしは帰らない！ 帰らないー！ 帰らないってばっ！」

必死で壁にへばりつき、エレーンは声を張りあげた。

「お願い！ あたしと一緒に戦ってよ！ デイールはもう、すぐそこに来てるのよっ！」

「俺が行く」

日の当たる窓辺から、ぶっきらぼうな声がした。

交渉3

平然としていた柳眉をひそめて、統領代理が振り向いた。

「……ケネル」

それが彼の名前であるらしかった。声がしたのは、案内の長髪が歩いていった、あの窓辺の一団あたりだ。

黒い髪 of 青年が腕を組んで眺めていた。年齢は二十代後半といったところか。凜とした黒瞳、癖のない顔立ち、たくましい蓬髪が背後にいる為、ともすれば小柄に見えるが、弱々しい印象はない。

揉み合っていた全員が、たちどころに動きを停めた。ケネルのただの一声で。

女将が忌々しげに腕を払って、そちらの窓辺に憤然と目をやる。その表情が凍りついた。

「ガ、ガーディアン？——どうして、ここに」

人垣の向こうで、亭主が拘束を振り払い、いぶかしげに呼びかけた。「お前、あいつらを知っているのか」

「——あ、いや。別に知り合いつてわけじゃないんだけど、その、」
我に返って顔をあげ、女将は言いにくそうに口ごもる。エレーンは開け放った窓辺を怪訝に見やった。

四人の男がケネルを取り巻いてたむろしていた。顔を見るなり亭主の腕をひねりあげたあの乱暴な長髪もいる。蓬髪の男のたくましい腕に、青い入れ墨が見てとれた。

「事情はわかった」

ケネルと呼ばれた窓辺の彼が、落ち着いた口調で事もなげに言った。「ちよつと行って、始末してくりゃいいんだろう」

「隊長が行くなら、俺も行くぜ！」

卓で見ていた傭兵が、弾かれたように立ちあがった。次々同調者が椅子を蹴る。勢い込んで引かれた椅子がガタガタ騒がしく音を立て、大部屋はにわかに騒然とした。

許可を乞う視線で注視され、統領代理は呆気にとられたように絶句した。今や半数が席を立ち、ケネルの言葉に同調していた。着席している者たちも真摯な視線を向けている。

「——いいでしょう」

一同の顔を見渡して、統領代理が向き直った。

「仰せに従いましょう、奥方様」

ぽかん、とエレーンは口を開けた。事態が上手く飲みこめない。

統領代理は降参したように苦笑いした。

「聞いている通り、いわゆる兵はないんだが、あなたにはこの、とっておきのボディガードをお貸ししよう」

ふと気づいたように視線を巡らせ、男たちに手を振った。それを合図に、屈強な人垣が速やかに離れ、元の卓へと散っていく。いともあっさり拘束を解かれて、エレーンは戸惑って見まわした。「あ、あの、なんでいきなり、そんなふうに……？」

何やら狐につままれた心持ちだ。たった今まで、つまみ出される寸前だったのに。統領代理が笑みをたたえて両手を広げた。

「あなたは我々を仲間だと言ってくださった。あなたの家族だと言ってくださった。ご覧なさい、彼らの顔を。止めたところで結果は同じだ。あなたに付いていくでしょう」

「……は、はあ」

エレーンはたじろぎ笑いで小首を傾げた。まったく訳がわからないう。とってつけたような大仰な台詞。芝居がかったあの身振り。手の平返したようなこの態度。だが、統領代理は澄ました顔だ。

「我々があなたの仲間というなら、同胞の危機を黙って見過ごすわけにはいきませんか。今、彼らがここから動けば、正直、丸腰も同然なんだが——」

諦めたように微笑んで、しなやかな手をさし出した。

「まあ、いい。我らが命運、あなたの手に委ねましょう」

統領代理との話が済むと、エレーンは窓辺へ駆け寄った。

「あ、あのっ！」

意を決して呼びかけると、ケネルが無造作に目を向けた。小柄なのかと思っていたが、期せずして案外上背がある。近くで見ると遠くで見るとでは大違い。後ろにいる蓬髪の迫力がありすぎるのだと気がついた。

窓辺の彼らも身じろいで、各々エレーンに目を向ける。無言の視線に注目され、エレーンは気まずくたじろいだ。恐らくその気はないのだろうが、どうも雰囲気が威圧的だ。

「あ、あの、ありがとう。お陰でとっても助かったわ。あ、あの、それで——」

切り出したものの、エレーンは詰まった。五人もいるのに、誰も言葉を返さない。見物されてでもいるようで、そこはかとなく、ばつが悪い。しょっぱなから萎縮するが、なけなしの勇気を奮い起こして、しどもど笑ってケネルを仰いだ。

「あなたがいなかったら、どうなってたか。あたし、どうしていいのか、まるで見当もつかなくって——」

なにぶん初対面の相手であるので、どう話しかけていいやらわからないが、とりあえず小首を傾げて笑ってみた。ぎこちないのはこの際やむなし。

ケネルは無言だ。応答どころか表情さえも崩さない。愛想笑いも何もない。不機嫌なのだろうか。

口をつぐんで反応を待つが、ケネルは腕を組んで眺めたままで、相槌さえも打ってくれない。仕方がないので勝手に続けた。「あ、で、でもね？　あなたのお陰で、あたし、なんとか乗り越えられそうな——」

「さっさと戻れ」

面食らい、エレーンは啞然と絶句する。その顔をやおら見やって、ケネルが改めて口を開いた。

「あんたの街にさっさと戻れ。いつまで油を売っているつもりだ。あんたには、すべきことがあるだろう」

「すべきこと？ あたしに？」

おうむ返しに復唱し、エレーンは首を傾げて考えた。そうは言われても、とっさに何も思いつかない。警邏には管轄外だと言われたし、義兄の協力も得られなかった。ちなみに、ノースカレリアに軍はない。他に何かあるというのだ。今、自分がすべきこと——。ケネルは落ち着いた声で淡々と続けた。

「領主が不在というのなら、あんたがその代行だろう。往来で泣いている暇なんか、あんたにはもう、ないはずだ。このことを領民に知らせなくていいのか。ディールが攻めてくるんだぞ」

「あっ！——は、はいっ！」

はっと弾かれて背筋を伸ばし、エレーンは慌しく頭を下げた。すぐさま夫妻の元に戻って返す。言われてみればその通り。こんな所で愛想をふりまいている場合じゃない！

「あのっ！ あたし、すぐに戻らないと！」

「ああ、セヴィ、ちょっと残ってくれないか」

統領代理が割り込んだ。戸口に向かいかけたどくろ亭の主が、肩越しに声を振り返る。「なんの用だよ、デジデリオ」

「話がある」

笑みを浮かべる統領代理と、怪訝そうな亭主の顔とを、女将は胡散臭げに見比べた。「そうかい？ じゃあ、あんたはゆっくりしておいでよ。あたし達はお先にね。さあ、帰ろう、エレーンちゃん。こうなったら、あたしも及ばずながら力を貸すよ」

「お前もだ、ビビ」

「……あたしも、かい？」

声を裏返して確認し、女将は腑に落ちない表情で、物々しい周囲をたまりかねたように盗み見た。「でも、この子を一人で歩かせるには、ここいら、ちよいと物騒だしさ。話があるなら後で聞くよ。送り届けて戻ってから——」

「なら、護衛をつけよう」

統領代理はにこやかに、だが、にべもなく退けた。「心配いらな

い。責任をもって屋敷まで送る」

片手を軽くあげた途端、近くにいた男二人が機敏に立ちあがって近づいた。ぽかんと見ていたエレーンの腕を、両側からそつなく取る。「さ、参りましょうか、奥方様」

「え？　ちよつと、あの！——お、おじさん？」

エレーンは慌てて助けを乞うた。呆氣にとられて見ていたどころ亭の主が、統領代理を一瞥する。軽く息をついて気まずそうに笑った。「ああ、悪いな。その人たちと戻ってくれるか。なんだか用があるらしいからさ。後でビビと顔を出すよ」

「……あ、はい。それじゃあ、後でまた」

さりげなく抗っていたエレーンは、やむなくぎこちなく頷いた。心細かったが、本人に言われてしまっただけは仕方がない。

肩越しに夫妻を振りむき振りむき、追い出されるようにして部屋を出た。何気ない約束が果たされないとは思ってもせずに。

協力者たち

協力者たち

「——なんでえ、今のは」

蓬髪の男が目をすがめ、黒々とした無精ひげをさすった。たくましい上腕には、青い入れ墨が彫ってある。年の頃は三十後半、赤いバンダナで額をくくり、脱いだシャツを裸の肩に引っかけている。

「さあ。囲まれちまって、よく見えなかったが」

四十絡みの短髪の男も、不可解そうに戸口を見た。「確かに妙な按配だったな。今、あの主が何か——」

「大方、威嚇でもしたんだろうさ」

声がぶっきらぼうに割りこんだ。エレーン一行を案内してきた、あの長髪の青年だ。やおら革ジャンの腕を組み、戸口に冷ややかに目を向ける。

「一見普通の市民に見えるが、どうしてどうしてそんな生易しいもんじゃない。あのジジイ、傭兵をしていた経験がある。あの目、あんたから見たらうが。こっちを全員向こうに回してガン飛ばしてきやがった。得物を持たせりゃ、恐らくあの場の誰より強い」

「それも、遙かにな」

野太い声で、蓬髪が駄目を押すように同意した。思案するように顎をさする。「ありゃあ、おめえ、段違いだろう。本気になったら、俺らだって敵うかどうか」

「代理の友達^{ダチ}だってのも頷ける。どうも嫌な気がして手出ししねえ

で連れてきたが、そうしたら案の定、あの有り様だ」

一同が苦りきっていぶかしんでいるのは、今しがた起きた奇異な現象についてだった。統領代理の指示により亭主らを捕らえようとしたところ、二人を封じこめた人垣がだしぬけに外側に飛びのいたのだ。以降、一人として、亭主に近寄ろうとはしなかった。あの戦慣れた傭兵たちがだ。それで結局、代理自ら片をつけた。

扉は沈黙を守っている。今の奇妙な騒動があたかも嘘であるかのように。蓬髪が大仰に我が身を抱いた。「ああいう手合いとは関わり合いにはなりたかねえな。背筋が薄ら寒くなるぜ」

「——おっもしれージジイ」

場違いに呑気な声がした。

日の当たる窓の手すりに、ひよろりと長身の若者が一人、足をぶらつかせて腰かけていた。目を覆うほどの薄茶の髪が、外光に柔らかに透けている。薄茶色したガラスのように透明な瞳は、窓の外を無関心に眺め、逆手に握った短刀で、手すりを無造作に傷つけている。飄然とした言葉の通りに、単に面白がっているようだ。短髪の男が苦笑いした。「おい、ウォード、吹っかけるなよ。あれは代理のご友人なんだからな」

五人の男が室内にいた。互いを呼び合う呼称から、彼ら五人の名前が知れる。短髪の年長者ババ、蓬髪の壮年アドルフアス、端整な面持ちの長髪ファレス、飄然とした若者ウォード。そして、今しがた助力を買ってでた、ケネルと呼ばれる黒髪の青年。

ケネルは口を挟まず聞いていたが、話が一段落したのを見計らい、雑談を打ちきるように口を開いた。「さて、聞いての通りだ。俺は奥方に力を貸す」

「勝算は」

鋭い視線で、蓬髪がすかさず顎をしゃくる。

「ある」

端的に応え、ケネルは視線をめぐらせた。

「ディールの本隊、並びに収奪目的地は商都カレリア、分遣隊の目

的は補充兵の確保だ。カレリアには元より兵力が少ない。それを国境守備と商都封鎖に振り分けている。よって、当地への分遣隊の規模では、街を包囲するのが精々だ。つまり、脅して降伏させる胆はらだろう」

他人に指示を与え慣れた声だ。四人の視線が集まる中で、ケネルは淡々と説明する。

「ディールの余剰兵力のなさ、目的地が非武装地との条件から推せば、分遣隊は二百やそこらというところだろう。兵の補充はないとみていい。商都を封鎖中のディールには、本隊の主力を割いてまでクレストにかまける余裕はない。又、任地を離脱しても支障がないなら、分遣隊の陣容は弱卒だろう。分遣隊を二百、当方の残留人員を三十として、七倍近い兵力差だが、まともに当たっても勝算はある。実戦経験のあるカレリアの兵は、かつてシャンバールの進駐軍と戦った国境軍くらいのもので、更にその弱卒というなら、相手は素人も同然だ」

「乗った！」

腕組みで聞いていた目をあげて、アドルフアスが決然と顎を引いた。

「俺は行くぜ。あの奥方に協力する。あれじゃあ、あんまり不憫じゃねえかよ。お前らだって見たろうが。あんなに駆けずり回って可哀相によお。他でもない俺達を、あの娘こは頼ってきたんだぜ。それを見捨てたとあっちゃ男がすたる。そうだろ、バパ！」

野太い声で賛同を求め、隣のバパに目を向ける。バパは頬をゆめて苦笑いした。「このところ、いささか運動不足だからな。解消するにはもってこいか。もっとも、退屈しのぎで出向くにしては、いささか大掛かりの嫌いはあるがな。この平和なカレリアでは、この手の転覆劇は例がない。しくじれば一卷の終わりだから、ディールとしても必死だろう」

思慮深そうな茶色の瞳を、窓辺に座った若者に向ける。「どうする、ウオード。お前もくるか」

ひよろ長い片足をぶらつかせ、ワードは外を見たままだ。無頓着にあくびした。「……いいよー。暇だしー」

大して興味はなさそうで、逆手のナイフの切っ先は、依然として手すりに切りつけている。

「よし決まりだ！　そうこなくっちゃな！」

ごつい拳を手の平で叩いて、アドルフアスが不敵に笑った。

「そうと決まれば行動開始だ。あの不憫な奥方を、総力あげて助けてやろうぜ。なあに、カレリアのカカシなんぞ、わけはねえ」

大口開けて豪快に笑う。ふと気づいたように口をつぐみ、視線を窓辺に振り向けた。

「——あ、ああ。お前も乗るだろ、ファレス」

鼻白んだように調子を落とし、不精ひげの頬をばつ悪そうに掻く。窓に腕組みでもたれたままで口出しせぬ者がいたことに、今更ながら気づいたらしい。ファレスがたるそうに振り向いて、一同をやら見まわした。

「不参加だ」

つくづく呆れた顔をする。「頭を冷やせ。ただ働きだろ。なんでそんな面倒事に首を突っこまなけりゃならねえんだ。アド、他人のことは放っておけよ。こっちには関係ねえだろう」

「——たく。しけたこと言ってんじゃねえよ。お前に男気はねえのかよ。見たろうが、あの屋敷の裏道でよ」

「不参加だ」

にべなくファレスははねつける。

「今回の任務は代理の護衛で、女の手先になる事じゃない。ディーの弱卒に恨みがあるってわけでもなし」

「——だが、ファレスよ」

「そんなにやりたきゃ勝手にやれ。火傷したって知らねえからな」
「わかった」

声がかきっぱりと割りこんだ。黙ってやり取りを聞いていたケネルだ。たるそうに振り向いたファレスの顔に、ケネルは淡々と目を向

ける。

「無理強いはいしない。どうせ大した戦でもない。そもそも仕事の枠外だ」

「そういうことだ」

もたれた窓から背を起こし、ファレスがさばさば踏み出した。

「ま、精々気張れや、正義の味方さん方。じゃあな」

薄茶のしなやかな長髪が、人けない廊下へ素っ気なく出ていく。

木目の扉が、パタリ、と閉まった。

「——もうた女の所かよ。相変わらず愛想がないねえ」

持て余したように嘆息し、アドルフアスが黒い蓬髪を掻いた。非協力的なファレスの態度を咎めようとする者はない。周囲から浮いた素っ気なさも、毎度のことであるようだ。

ファレスの退室を淡々と見送り、ケネルが気づいたように振り向いた。

「ジャックはどうした」

腕組みで窓辺にもたれていたバパが、苦笑いして首を振った。「

さあ、どこへ行ったものやらな。あれも、よくわからん男だから」

「知るわけないだろー、ジャックのいる場所なんか」

窓の外を眺めたままで、ウォードが興味なさげに呟いた。

摩擦 1

轍^{わだち}の刻まれた黒土の地面に、光がまだらにちらついていた。昼さがりの街道筋。高木の枝で小鳥はさえずり、人影がゆったり、木漏れ日の日陰を行き交っている。荷馬車、商人、散策中の観光客。ディーラーと一戦交えるとなれば、街へと続くこの辺りが主戦場になると思われる。件の天幕群の建物では、街に迫りくる敵軍に備えて傭兵たち^ちがたむろしている。

午後の静寂をだしぬけに破って、パパが待機所に駆け込んできた。「おい、ケネル、話が違うぞ！ 支隊は既に二日の距離だ。しかも、脅しにしては、かなりの数だ。百や二百なんてもんじゃない。軽く一千は越えている」

「確かか、それは！」

知らせに驚き、蓬髪のアドルファスが振り返る。「ここは平和なカレリアだぞ。なんで、そんなに兵があるんだ！」

「——知るかよ、俺が」

嘆息して一瞥し、パパは身じろいで肩をすくめた。「現にあるんだから、仕方がないだろ」

「待機していた、というわけか」

ケネルはおもむろに腕を組み、いぶかしげに眉をひそめる。

「聞いていた話と大分違うな。だが、本隊は籠城戦の最中だ。国境は封鎖したにせよ、防衛部隊は動かせない。商都の西門と南の正門、街壁外周に配すとなれば、膨大な兵員が必要だ。要員確保に汲々としている状態で、非武装地の併合ごときに兵を費やせるはずはないんだが」

アドルファスが忌々しげに舌打ちした。

「どうすんだ。こっちは、たったの三十だぜ。これじゃあ渡り合いうのがねえじゃねえかよ」

気楽に下見に出向いたバパが、急ぎ仲間にもたらしたのは衝撃的な報だった。二百と見込んだ敵陣は、開けてみれば一千超。対する手勢はわずかに三十。使者が本陣に立ちもどり、指示を仰いで開戦となれば、通常十日以上はかかるはずだが、交渉決裂から開戦まで、わずかに二日と切迫している。

ケネルは渋い顔で顎をさする。「――まずいな、本気か。端からクレストを潰す気だ」

「いーじゃん、敵が大勢いたって。どうせ、結局同じことだしー」
声がのんびり割って入った。ウォードは窓辺に腰かけて、相変わらず手すりを傷つけている。全く気にしていないようだ。それを腕組みで眺めやり、バパが長に目を向けた。

「どうする、ケネル。千を超える兵隊じゃ、とても食い止めきれないぜ。数で押されたら一巻の終わりだ。占拠は時間の問題だろう」

「手勢は三十、住民の動員は論外か。バードを使うしか手はないな」
「――あー、丁度いいねー。馬鹿騒ぎしに集まってるし」

事もなげにウォードが割りこむ。バパは肩をすくめて同意を示し、そつなく茶々を受け流す。ケネルの思案顔に目を向けた。「だが、連中、果たして協力するかな」

「させるしかないだろう」

「その前に！ 一つ、でっかい問題があるぜ」

かったるそうな銅鑼声が、堪りかねたように待ったをかけた。バパとケネルはアドルフアスに目を向ける。その顔を交互に見やって、アドルフアスは窓の外に目を向けた。

「バードを駆りだす事それ自体には、俺もなんら異存はねえ。逃げ足だけは速ええから、大して実害はなからうし、そこそこの働きも期待できる。だが、肝心なことを忘れちゃいねえか。ここはあのノースカレリアだぜ」

ケネルがわずか眉をひそめた。言わんとする意味を察したようだ。

アドルフアスは苦々しげに続ける。「連中の武装を、住民が果たして認めるかどうか。なにせ、ここは因縁の地だからな」

「――認めるだろう。そうしなければ、この街は終わりだ」

一拍置いて、ケネルは応じた。返答が遅れたわずかなその間が、検討するも考慮に値せずとして切り捨てた要因があることを示している。だが、アドルフアスは釈然としない面持ちだ。ケネルは構わず、西方に広がる穏やかな街並みを眺めやった。

「介入する必要はない。むしろ仲裁に乗り出せば、騒ぎが余計にでなくなる。住民の説得は奥方の仕事だ。あの威勢の良さなら、まあ、どうにか乗りきるだろう」

「――だがよ」

アドルフアスは依然として納得のいきかねる面持ちだ。西の街並みを眩しそうに見やって、無精髭の顎を片手でさすった。「大丈夫なのかよ、あんなひ弱なねえちゃん一人で。ディールとクレストの挟み撃ちにでも遭ってみろ。こっちは目も当てられねえぞ」

「心配ない」

ケネルは口端で薄く笑った。

「ああ見えて、あの女は馬鹿じゃない。使者の脅迫に屈することなく、武力の圧力に臆することなく、現時点で一番分のあるここへ来たというんだからな。あれが気弱な女なら、軍勢急襲の勢いに押されて、あえなく敵に降伏している。そうなれば、今頃は他領に占拠されるか、妙な面子にこだわって玉碎するか、していたところだ」

一同が眺める方角には、貴族らの住まう貴族街があった。彼女のいるクレスト邸は、その一番奥まった西の断崖に面している。

「とにかく」

話をおもむろに切りあげて、ケネルは一同を振り向いた。

「状況が変わった。あの女を呼べ」

摩擦2

摩擦

麗らかな夏の昼下がり。領邸の奥まった広い客間で、エレーンはやきもき手を握り、壁際で様子を窺っていた。

フロック・コートの貴族らが無然と眉をひそめていた。この召集された十余名は「ノースカレリア貴族院」の構成員、いわば、施政権限を有する実力者たちである。いずれも椅子の肘かけにステッキを立てかけ、染み一つない白手袋に、筒型のトップハットという正装だ。

椅子の背もたれにふんぞり返り、或いは肘かけに頬杖をついた貴族らは、現状を説明するケネルの顔を冷ややかに、胡散臭げに眺めていた。一様に不愉快そうな面持ちだ。ケネルの粗野な服装が見慣れぬことも不興を買った一因だろうが、理由は何もそればかりではあるまい。腹立たしげなどの顔にも、不快と嫌悪があらさまだ。

曰く、

「こんな怪しげな下賤の者が、何故、差し出がましく指示をするのか」

「こんな薄汚れた傭兵風情が、何故、偉そうに講釈なんぞを垂れるのか」

「使用人あがりのあの女に、何故、呼びつけられねばならんのか」
由緒正しきこの「私」が。

要するに、話の内容以前に、己が不当に軽んじられているようで

気に入らない、というわけである。

ケネルは彼ら貴族に対して、一切敬意を払わなかった。おもねるところか愛想笑いさえ浮かべるでもない。いっそぶつきらぼうなまでに現況のみを説明し、まして戦の素人の貴族らに意見など求めはしない。現時点での状況を伝え、苦戦になるだろう予測を伝えて、緊急時の対処法を一方的に指示するのみだ。その素っ気なくも実務的な態度が、追従に慣れた貴族らの反感を買ったことは火を見るより明らかだった。白けた空気の立ちこめる中、前に立ったケネルだけが、淡々と淀みなく話している。

大窓の外の青い空に、雲がぽっかり浮いていた。屋敷脇の植栽の緑が、そよ風に梢をゆらしている。貴族らは冷ややかに口を閉ざして、憮然とケネルを値踏みしている。質問を差し挟むというのでもなければ、意見を述べようとするでもない。ただただ仏頂面の沈黙で、無言の抗議を突きつけるばかりだ。

「――要点は以上だ」

一通りの説明を終え、ケネルは視線を巡らせた。

「可能な限り、攻撃は外で食い止めるが、敵はいかんせん数が多い。万一の侵攻に備えて座員に街を巡回させるが、その際、武器の携行を容認しておいてもらいたい。連中だって命は惜しい。素手でやり合えと言われれば、さすがに協力はしないだろう」

「わかった。携行を認めるわ！」

横で控えたエレーンは、ここぞとばかりに了解した。「それじゃあ、あたし、すぐに手配を――」

「お待ちください、奥方様」

初老の貴族が血相変えてさえぎった。こほんと小さく咳払いし、冷ややかな目をおもむろに向ける。「それはいささか早計かと」

「そうです。ご再考ください、奥方様」

これを機に、貴族たちが堰を切ったように反論した。

「相手はあの遊民ですぞ。武装するなど以ての外」

「武器など持たせたら、何を始めるか知れたものでは――」

立ち上がらんばかりにまくして、一斉に不平を打ち鳴らす。

「それなら、俺たちはこの件から降りる。街と心中したけりゃ勝手にしろ」

ぶつきらぼうに言い捨てて、ケネルは出口に踵を返す。

「待って、ケネル！」

エレーンは慌てて駆け寄った。ケネルが足を止め、大きな嘆息で振り返る。肩越しに見やった黒瞳の思わぬ冷ややかさにたじろぎながらも、エレーンはおろおろ窺った。「あ、あの、ダドリーが前に言ってたの。いつか、あなた達に戻ってきてもらうって」

前列左の貴族の一人が、嘆かわしげに首を振った。「奥方様、今はそのような夢物語を語っている場合では」

「夢なんかじゃないわよ！」

まなじり決して、エレーンはそちらを振り返る。

「みんなで街を創っていくのよ！一緒にこの街を創っていくの！だって、ダドリーがそう言ってる——」

「しかし、奥方様。それとこれとは話が——」

「同じよ！——だから、彼らもこの街の一員だって言ってるのよ！！」
「たく、わかんない人達ねっ！ケネル、武器の携行を認めるわ！」

「しかし、相手は遊民ですぞ。信用なりません！」

「そうですね！そんな無謀な真似をして、この機に乗じて占拠でもされたら、どうなさるおつもりです。そんな失態は目も当てられませんぞ！」

又もやかましく言い立てる。今までかけらも喋らなかったのに、たちまち結束したようだ。エレーンは苛立って拳を握った。

「——だからっ！いい加減にしなさいよ！いつまで寝ぼけたこと言ってるの！だいたい心が狭いわよ。いつまでもいつまでも愚にもつかない見栄はって！これでデイルに負けちゃったら、一体どうしてくれんのよっ！」

ケネルは油彩画のかかる白い壁に寄りかかり、呆れたように嘆息

している。それも道理だ。散々説明させられて、挙句この有り様と
いうのだから。

頑固な貴族と喧々諤々張り合いながらも、エレーンはもどかしい
思いで唇を噛んだ。ケネルが現状を説明し、自分が勢い込んで承諾
し、貴族が一斉反発する。やむなくケネルが説明し、それを自分が
後押しし、貴族が一斉反発する——これでは一向に埒があかない。
だが、現にこうしている間にも、敵は着実に近づいてくるのだ。自
力で排除できない以上、ケネルの助力を得られなければ、むざむざ
降伏するしかない。となれば、所領はすべからく没収され、彼らも
当然立ちゆかなくなる——こんなにも自明で簡単な理屈が、この風
雅な貴族どもには、なぜ理解できないのか——。

ケネルは壁で腕を組み、実のない言い争いを無表情に眺めている。
だが、果てなく続く小競り合いに、ついに嫌気がさしたらしい、閉
口したように嘆息した。

「こっちは、どちらでも構わない。助力は不要と言うのなら、俺た
ちは一切、手は出さない。早く結論を出してくれ」

エレーンは瞠目して振り向いた。「——信用するわ！ あたし達
を助けて！」

「奥方様っ！」

言った傍から、猛反発が湧きおこる。

「——あんた達ねえ！」

エレーンは憤怒の息を吐き出した。

「だったら、あんたには妙案があるわけ？ あんたなら、どうにか
できるわけ！」

目の前の貴族を指でさす。

「だったら、あんたがどうかしてよ！ 現にディールは、軍を差
し向けてきてるのよ！」

「——そ、それは」

身を乗り出していた前列の貴族が、椅子の背まで後ずさり、困惑
顔で目をそらした。集団でいると威勢がいいが、個人攻撃には弱い

らしい。すかさずエレーンは次々指を突き立てる。

「だったら、そのあんたはどうよ！　だったら、あんたは！　そっちのあんたは！　——どうしたのよ、素晴らしい考えがあるんですよ！　だったら、それを聞かせてよ！」

一同は顔を見合わせて、不承不承口をつぐんだ。突如召集された彼らにすれば、この話は寝耳に水、助言ができるような取り巻きもない。これで代案が出る道理もない。だが、彼らの準備が整うまで、時間が止まってくれるわけではない。ディールは着々と近づいているのだ。怯んだ一同に構うことなく、エレーンは勢い込んで振り向いた。

「信用するわ、ケネル！　あなた達を信用する。だからお願い！　力を貸して！」

ケネルが面倒そうに目を向けた。

「だったら、あんたの領民にも、指示に従うように言ってくれ」

壁にもたれた背を起こし、出口に向けて歩き出す。貴族たちには一瞥もくれず、会釈一つするでもない。エレーンは慌てて了解し、両手を振って後を追った。

摩擦3

「そもそも、あんたが使者を追い返したのが原因じゃないか！」

「そうとも！ 穏便に対処すれば回避できたことだろう！」

「あんたがディールに楯突かなければ、巻き込まれなくて済んだんだ！ なんて余計な真似を——！」

一斉にがり立てられ、エレーンはたじたじ後ずさった。支持と協力を得る為に、貴族らに次いで住民の代表を呼び集めたのだが、街に配す遊民が武器を携行すると聞くと、やはり良い顔はしなかった。いや、それどころか——

「要するに、あんたのせいだろう！」

「そうだ！ そうだ！ どうしてくれるんだ！」

文句は言っても体裁を気にする貴族より、迫力はよほど凄まじい。だが、くじける訳には無論いかない。もじもじ両手を握り締め、エレーンはぎこちなく笑みを作った。

「で、でもね？ ここでディールに屈したら、みーんな戦場にやられちゃうのよ？ それって、やっぱ、まずいじゃない。それに、そんなことしたら、街だって乗っとられていいようにされて——」

「遊民に武器なんぞ持たせたら、たちまち街を占拠されるぞ！」

激昂した住民の一人が、口角泡を飛ばして言い募る。「そうしたら、あんた、どうやって責任をとる気だい！」

「……せ、責任？」

エレーンは引きつり笑顔でたじろいだ。

「一体てめえは何様のつもりだ！」

「え？ え？ ナ、ナニサマって、その——」

んなコト、あたしに言っただって！

涙目で一人おろおろする。まさに非難の矢面である。

「遊民なんぞにたぶらかされやがってよ！」

商店主が舌打ちで立ちあがり、手近な椅子を蹴り飛ばした。振り向きざまにギロリとすごむ。

「これだから若い女は駄目なんだ！　おう！　領主を出せ！　領主をよ！　あんたみたいな小娘じゃ、話にも何もありやしねえよ！」

椅子に腕組みでふんぞり返った男が忌々しげに詰問する。「そうだ！　領主はどうしたんだ！　さっさと、ここへ連れてこい！」

「——あ、——い、いや、それはそのお」

エレーンはしどもど左斜め上方に目をそらした。当人は早速、捕虜になっているのだが、用もないのに勝手にトラビアをうろついて、挙句とっ捕まった、などと間抜けでお粗末な顛末をさらせば、業火に油を注ぐこと請け合い……。憤怒に上気した一同の顔を、冷や汗たらたら上目使いでちらと見る。「あ、あのお、ちよっと今、出かけてて——」

「あア？　出かけてるう？」

男が呆れ顔で復唱した。揶揄するように両手を広げて、やゝれやれ、と首を振る。一転、椅子を蹴って立ちあがった。

「何遊んでんだボンクラが！」

住民たちが次々、拳を握って立ちあがる。いずれも激怒の面持ちだ。

エレーンは慌てて後ろの壁まで後ずさった。両手で壁に張りつきながら、あたふた涙目で逃げ場を探す。気色ばんで詰め寄られ、そこそ抜け出そうとした途端、ぐい、と首根っこつかまれて、輪の中に引っ張り戻された。

「いねえってのはどういうことだ！　この肝心な時によオ！」

「まったくだぜ！　お陰で、こんなメイドあがりやしやり出て、勝手な真似をしくさって！」

「トラビアから北への移動が、いや、本隊のある商都から大陸北端に移動するのに、一体何日かかると思う」

異質な声が割りこんだ。

エレーンを吊るしあげていた一同が、口をつぐんで振り返る。

そよ風吹きこむ開け放った窓辺で、ケネルが腕を組んで眺めていた。いぶかしげに注視され、一同に視線を巡らせる。

「商都からここまで、馬を駆って五日の距離。進軍するなら更にかかる。だが、交渉決裂から支隊到着までわずかに三日だ。この意味するところが、あんたらに分かるか」

住人たちは面食らった。戸惑い顔で、ちらと互いを盗み見る。ケネルは続けた。

「つまり、ディールは、端からクレストを叩く気だ。返答の如何にかかわらず」

「だ、だが、協力するよう、使者が来たと――」

「捨て駒が欲しかったんだろ。合意が成れば、無理に引っ立てるより統率が楽だ、遙かにな」

住民がざわざわめいた。疑わしげな面持ちで互いに顔を見合わせている。

「カレリアには元より兵力が少ない。だが、その点あんたらなら好都合だ。初めから数に見込んでいないし、商都陥落にこぎつけければ、ここは潰す^{はら}肚だろうからな」

「――な、なんで俺たちが！」

初老の店主が弾かれたように振り向いた。「俺たちは何もしてないぞ！ 何故、潰されなきゃならないんだ！」

「そうとも！ そんな馬鹿な話があるものか！」

「俺たちは無関係だぞ！ ラトキエとディールの戦だろうが！」

「一体俺らが何をした！ ディールを怒らせることなど何一つ――！」

「ディールの首都はトラビアだ」

素っ気なくケネルは遮った。

「ディールが国を統治するなら、ここらは距離があり過ぎる。監視が届かぬ地方の都市を無策のままに放置するのは反乱の芽を育てる

ようなもの、つまり、危ないからな」

「——そ、そんな——そんな勝手な！」

「商都を落ち延びた連中は、恐らくここノースカレリアに向かう。国境はディールが押さえているから、隣国シャンボールには出られない。よって、ラトキエ領家の残党どもは、余所者が混じっても目立たぬ場所に潜伏することになるだろうが、条件に適う都市は限られている。商都をディールが接收すれば、あとはノースカレリアを残すのみ。つまり、反旗を翻す反乱分子はすべからくこの地に結集する。ディールにとっては、ここは物騒なアキレス腱だ。そんな急所をみすみす放置するはずもない」

一同は言葉を失い、息を呑んでわなないている。ケネルは哀れむようにほんのわずか目をすがめ、それらを端から見渡した。

「品行方正なあんたらにはケチをつけられる謂れはないんだろうが、この街は既に、ディールの経略に組みこまれてしまっている。つまり、これは対岸の火事なんかじゃないってことだ。ディールに見つかっちまったのが運のつき、そう思って諦めるしかない」

住民たちは呆然と、事もなげに言葉を紡ぐ窓辺の傭兵を注視していた。この手の荒事に慣れているらしく、ケネルに動じた様子は見受けられない。声を荒げるでも、言い包めようと早口になるでもない。理不尽で冷酷な事実のみを、ただ淡々と突きつける。相変わらぬの無表情で。腕さえも組んだままで。

「仮に、ディールについたとしても」

衝撃を受け、静まり返った住民の前で、だが、それをいささかも意に介すことなく、ケネルは続ける。

「あんたらは指揮官に召集されて、商都を攻める捨て駒にされる。連中が欲しいのは、あの商都のみだからな」

エレーンを取り囲んだ面々は、戸惑い顔で立ち尽くし、おろおろ顔を見合わせるばかりだ。急にそう言われても、やはり踏ん切りがつかないらしい。やがて、その内の一人が思い切ったように顔をあげた。「だ、だが、そんなことは、やってみなければ分からないん

じゃ——」

「あんたらは奴隸になりたいのか！」

ケネルが苛立ったように一喝した。震えあがって首をすくめた一同に、改めて視線を巡らせる。

「あんたらは奥方に感謝すべきだ。この判断は賢明だ。ディールの要請を蹴っていないけりや、あんたら今頃どうなっていたと思う。戦と無縁のあんたらの国でも、聞いたことくらいはあるだろう。敗者の辿る惨めな末路を。そうなりや、あんたらだけの問題じゃない。妻子も親も同様だ。こうしたことは一蓮托生だからな」

おもむろに言葉を切り、落ち着いた声を更に強めた。

「いい加減に現実を見ろ。今となっては否も応もない。逃げ道なんか、どこにもない。まともな暮らしを守りたいなら、人として生き残ろうと思うなら、あんたらはディールを退けなけりやならない。あんたらのその手で。全てを賭けて！」

一同が目を見開いた。事ここに至って、ようやく、それを自覚したのだ。逃れる道は既がない、ということ。ディール襲来の現実には夢でもなければ幻でもない。ディールは現に攻めてくるのだ。

静まり返った客間の床に、窓から薄日が差しこんでいた。住民たちは立ちつくし、誰も口をきこうとしない。

「さあ、どうする」

打ちひしがれた一同を見やって、ケネルは淡々と決意を迫った。

「四の五の言わずに覚悟を決めろ。泣こうがわめこうが、この現実には変わりはない。採るべき道は二つに一つだ。大ラトキエに楯突いて死ぬか、自分の街を守って死ぬか。どちらを選ぶか、さっさと決めろ」

その頃、件の天幕群の入口では、一座の男たちがざわついていた。「で、そんな滅法危ねえ橋を、なんで俺らが渡んなけりやなんねーわけ？」

長い髪先をいじりつつ、一人が無然とそっぽを向く。「俺らは祭で来たっただけで、この奴には、なんの恩義もねえんだぜ」

「むしろ、どんなひでえ目に遭わされてきたか。あんたらロムだって知らねえわけでもねえだろうによ」

「それを事もあろうに、守ってやれ、だあ？——は！ 冗談じゃねえよ。俺らがそれをしたとこで、なんの得があるってんだよ」

そうだそうだ、と同意の声が沸き起こる。

一座の反応は芳しくなかった。ここノースカレリアの住人には、かつて彼らを手酷く迫害した過去があるのだ。そして彼我の間には、未だに冷ややかな隔たりがある。そうした経緯を踏まえれば、彼らが街の住人に対して強い反感を抱くのも無理からぬところというものだった。

不貞腐った態度で身じろいで、一人が揶揄するように肩をすくめた。

「第一、碌な武器がねえよ。あんたらロムと違って、俺らは戦争屋じゃねえからな。それとも何か？ そこのシケた果物ナイフで、でっかい軍刀と渡り合えっての」

芸能者たちに取り囲まれた、あのケネルの伝令は、堪りかねたように嘆息した。「それは追々なんとかする。とにかく人員を集めて街に詰める。隊長からの命令だ」

「——でもよお！」

「とにかく！」

伝令が苛立って遮った。

「代理が力を貸すと約束したんだ。ぐずぐず言わずに協力しろ！」

一方、置き屋の寝床で目覚めたファレスは、探った手が空を切り、うつ伏せた顔を大あくびであげた。寝ぼけまなこで隣を見れば、昨夜買った夜姫がいない。見れば、枕元に置き手紙。

「 ” あなたも逃げて下さいね ” ？ 」

ゆつくりと、声に出して読んでみた。

「……おい」

溜息と共に脱力する。つまり、見捨てられた、ということらしい。女物の着物ごと、ファレスはのっそり身を起こした。あくび交じりに手を伸ばし、向いの腰窓を引き開ける。ひっそりとした外の様子を片膝立てて窺った。

階下の通りに人影はない。商店はすべからく戸を閉ざし、観光客の姿も見当たらない。街は閑散と寂れていた。宿にも居残りはないようで、館内はひっそりと静まっている。路地裏にあるこの宿は、街の外側に位置するせいか、皆、避難を終えたらしい。

ゆるい風が無人の路地を吹きさらう。ごみ箱の上の猫だけが、無関係な顔でニャアと鳴いた。

「——たく。仕方がねえな」

舌打ちで頭をぼりぼり搔いて、ファレスは黒いランニングを拾いあげた。裸の腕を無造作に通し、襟ぐりに頭をくぐらせる。昨夜脱ぎ捨てたズボンを履いて、革のベルトを締めあげた。

「行くとするか」

身支度を整え、上着をつかんで、宿の出口へ足に向けた。

ケネルは街道を闊歩していた。仲間は既に集まっている。

「物見櫓をありったけ集めろ」

「——ヤグラだァ」

部下に投げたその指示を、アドルフアスが聞き咎めた。たくましい腕を腹で組み、空に突き出たステージを怪訝そうに眺めやる。「だが、ありゃ祭用の櫓だろ。あんなもの一体どうする気だ」

「この街には街壁がない。西は断崖だから良しとしても、街道に面する東の側面が開けっぴろげというのでは、いくらなんでも護りきれない。櫓で街道を封鎖する」

「だが、東の先は樹海だぜ。足場は悪いが、がら空きだ。それに街

の南だつて似たようなもんだ。もつとも向こうにや、獣避けの外壁はあるがな。だが、敵がその気になりさえすれば、あんなもんはいくらだって乗り越えられる。街道の左右から回りこめば、簡単に中に入りこめちゃうぜ」

「獣を放せ」

「獣？」

「見世物で使う猛獣だ。ああ、白くてでかいアレがいたな。あれなら、うってつけだ」

「——バクーを？　バクーを森に放す気かよ」

「バードは獣を扱うからな。大方飼ひ慣らして番犬代わりに連れ歩いているだろ」

「だが、連中は人を喰らうぞ。あんな化け物を放したりした日にや、逆にこっちが食われかねえぞ」

「さすがに扱いきれないか」

「無理だろうな、いくら獣使いでも」

「なら、鎖で足でもつないでおくか」

いずれ敵軍が姿を現すであろう街道の先の南方に、ケネルはおもむろに目をやった。

「三十対一千。この途轍もない兵力差をどうにか埋める必要がある。東西の森を塞いでしまえば、敵の侵攻ルートは街道一本に絞りこめる。それなら前線の上限は、狭い道幅が最大だ。——そうだな、街道付近に餌でもまいて、精々姿をちらつかせておけ」

街はにわかに騒然とした。

公邸に呼びつけられた代表が、ディールの襲来を伝えたからだ。住民たちは驚き、嘆き、憤り、そして、降ってわいた戦に備えた。飲料水を慌てて蓄え、食糧を備蓄し、避難経路を確認し——。

そして、互いへの不審がぬぐえぬままに、ディールの放った軍勢は、街まで一日の距離に迫っていた。

二章に続く

開戦 1

街に面した街道には、多くの傭兵が手慣れた様子で行き来していた。なだらかに続く街道の先には、敵が大挙して陣取っているはずだが、彼らに動じた様子はない。

「どうする。敵さん、ごまんといるぜ」

敵情視察に出ていたバパが、陣を構える街道の北に戻ってきた。思わしくない旗色に、仲間たちから溜息が漏れる。ケネルが詳細を促した。

「総数は」

短髪の年長者は足を踏みかえ、敵が控える街道の南を眺めやる。

「千五百——いや、二千とどこか」

「いいや。精々千二百だ」

落ち着き払った別の声が、横から話に割りこんだ。

開戦

「——あれ、副長。来たんすか」

通りがかった傭兵の一人が、木陰でもたれた姿を見咎め、意外そうに首を傾げる。円陣を組んだ一同が、各々身じろぎ、振り向いた。いずれも、いぶかしげな面持ちだ。不参加のはずのあの彼が、突如、現場に現れたからである。

副長と呼ばれた木陰の男は、樹幹にもたれて腕を組み、白けた顔

で見物している。呆気にとられて眺めたパパが、顎の先で促した。

「ファレス、お前は降りたはずじゃなかったか？」

構うことなく、長髪の副長は歩み寄る。「正規軍が九百、傭兵が三百」

「傭兵？」

「たく、何を見ていやがる。横着しねえで、数は正確に数えろよ」
じろりとパパを睨みつけ、ファレスは一同を見渡した。

「無邪気に突っ込みや即刻死ぬぞ。連中、助っ人を呼びやがったな」
円陣が顔を見合わせた。面食らったような面持ちだ。ややあって、蓬髪のアドルファスが身じろいで、一同の困惑を野太い声で代弁した。

「まさか、このカレリアで、傭兵を使うところがあるとはな」

長らく、カレリア国には戦がない。その手の物騒な輩とは、元より無縁の国柄だ。そのカレリアに「傭兵がいる」というのなら、隣国で稼ぐ彼らの同業者に他ならない。

カレリアの隣国シャンボールでは、国を二分する内戦が長きにわたって続いている。今は停戦中ではあるものの、多数の本職の傭兵が荒っぽい戦場を渡り歩いて稼ぎ場としている現状がある。激戦を潜り抜けて生き残った彼らは言わずと知れた戦闘のプロ、平穩な国カレリアの、形ばかりの軍兵などとは比ぶべくもない姑息で抜け目ない猛者揃いだ。つまり、彼らが敵陣営に加わるかどうかで、勝手が大きく違ってくる。戸惑う面々に構うことなく、ファレスは素っ気なく先を続けた。

「敵の本拠地トラビアは、隣国と境を接している。国境を仕切るデイルにすれば、連中を雇い入れるなんぞ造作もねえだろ。現に傭兵がそこにいる。それなら事情はラトキエも同じ、この大番狂わせで、大方、身動きがとれなくなっちまってる」

隣国シャンボールでは、傭兵で稼いでいた面々が現在職にあぶれている。彼らは一時の享楽を求めて、或いは店舗や貨物の用心棒などの職を求めて、活気のある市街地へと大挙して流れる。往来・物

流共に盛んな国境付近の盛り場などは、行きつく先の最たる場所、そこにたむろす失業者をディールが密かに雇い入れることは、そう難しいことではない。

じっと話を聞いていたパパが、天を仰いで、やれやれとごちた。

「それにしたって桁が違うぜ。千二百対三十はねえだろうよ」

「勝ち目はねえな。まるで、ねえ」

アドルフアスも片手で蓬髪を掻いて、いささか投げやりに同意する。兵力にそうまで開きがあれば、話にも何もなりはしない。個人の力量でどうこうできる繊細な範疇など越えている。ファレスは敵陣とは逆方向の、街道の北を顎でさした。

「バードに得物を持たせろよ。そうすりゃ少しは楽ができる。奴らは芸事で鍛えているから、ディールの鈍らより切れ味がいい。むしろ弓の腕なら一級品だぜ。なにせ、狩りの的は野生の獣だってんだからな。狙いは正確、格段に身軽で、逃げ足も速い。足手纏いにならずに済む」

「だが、それでも百が精々だろう。いや、そこまで集まるかどうか」ファレスが示した方向を眺めて、パパが思案に暮れて顎をなでた。それでも精々千二百対、百三十——焼け石に水というものだ。

一同が眺める街道の北には、一大天幕群が広がっていた。灰色に荒んだ天幕群は、そびえ立ったバリケードの向こうで、一同の出方を窺うようにひっそり息を潜めている。この開戦のあおりを食って、祭も興行も全て中止だ。

ケネルは眉をひそめて思案している。ファレスはそれを一瞥し、右手の街を顎先でさした。「なら、その連中でも駆り出すか？

あれなら数には事欠かないぜ」

「無駄だろう。得物など持ったこともない連中だぞ」

ケネルはにべもなく却下した。

「この住人は戦には不向きだ。全く鍛錬していないし、訓練しようにも今更だ。出したところで犬死がおちだ」

敵軍が控える街道の南へ、淡々とした目を向ける。「要は、将を

潰せば片がつく。無駄駒を使う必要はない」

「ま、頭を狩るなら、そいつの周囲の分厚い壁を突破しなけりやならねえが」

長に退けられるのは予め見込んでいたようで、ファレスは素っ気なく引き下がった。さばさばと話題を切り替えて、一同に視線を巡らせる。

「軍服の正規兵^{こしぬけ}どもはともかくとして、周囲を固める傭兵どもが邪魔になる。外から徐々に切り崩そうにも、とてつもねえあの数だ。まともにぶつかっても骨が折れる。とくれば、あっちの傭兵連中に、こっちの顔を知る奴がどれだけいるかって話になるが――」

豪華な絨毯が敷かれた居間を、エレーンはそわそわ歩き回っていた。日差しさしこむクレスト公邸、彼女のいる広い居間には他に誰の姿もなく、ひっそり静まり返っている。

「奥様、お茶をお持ちしました」

扉の外から声をかけ、件の老執事が入ってきた。静かな居間を恭しく進み、湯気の立った紅茶を卓に置く。

「あつ――う、うん。ありがと、爺^{じい}」

外の様子を気にしながらも、エレーンはあたふた長椅子に座る。鬨^{とぎ}の声が外であがった。ぎよっと椅子から飛びのいて、エレーンは弾かれたように窓へと走る。南の窓を開け放ち、身を乗り出して目を凝らした。

ここは三階。高い建物が付近にないので、遠く街の外まで見渡せる。距離がある為しかと視認はできないが、草原の緩やかな起伏の向こうに、辛うじて土煙が見てとれる。

「じ、爺！ どうしよう！ デイルが来たわ！」

土気を上げているらしい荒々しい指揮官の怒声が、穏やかな初夏の風にのり、居間の窓辺まで微かに届いた。とても座っていられずに、エレーンは前にも増してうろろう室内を歩き回る。ついに戦が始まったのだ。

「落ち着きなされい、奥方様」

声をふと振り向けば、豪奢な長椅子の真ん中に、古い枯れた小柄な執事がちょこんと腰をかけている。そして、己れで己に淹れた茶を、姿勢も正しく、ずずつと啜る。「ここで我らが騒いだところで、事態は好転致しませぬ」

「そ、そんなこと言ったってー！」

エレーンはこちらを見回して、親指の爪をそわそわ嚙んだ。澄ました執事を盗み見る。なんか他人事に聞こえるのは気のせいかな？

(……どうしよう)

いてもたってもいられなかった。あの自信たっぷりの口振りでは、ケネルと仲間は慣れているらしいが、これは紛れもない戦争なのだ。これで死者が出るかもしれない。少なくとも、怪我人は大勢出るだろう。それもこれも、みんな己が発端だった。片や自分が要請を蹴ったから、片や自分の懇願に応えたからこそ、彼らはああして相まみえんとしているのだ——そこまで考え、エレーンはピタリと動きを止めた。嫌な自覚がじわじわ広がる。もしかして、これって

(あたしの、せい？)

たらし、と汗がしたたり落ちた。

血濡れた戦場が脳裏をよぎる。阿鼻叫喚の地獄絵図。これが自分のせいだなんて、これで誰かが死んだりしたら、なんだか、ものすごーく後味が悪くないか？ いや、ディールが引き揚げてくれれば、それでいいのだ。当方全く異存なし。こっちだってできることなら、是非とも穏便に済ませたい。けれど無論、ディールが同意見とは限らない。

(どーしたらいいの？ どーしたらいいの？ どーしたらいいの？)

焼ききれた頭で手立てを探すも、思考は微塵も進展しない。なんとか気分を落ち着けるべく、紅茶をとりあげ、口をつけた。

(……も、もう、やだ、こんなの)

薄いカップの縁に当たって、前歯がカチカチ鳴っていた。青い顔で縮こまり、カタカタ震えて考える。戦争というからには、やはり、

斬り合ったりするんだろうか。でも、真剣なんかで切られたら、多分ものすごく痛いだろう。うっかり指先切っただけでも涙目になるくらい痛いのに。どんなに頑丈にできてても、男の人だって、きつと同じだ。まして真剣なんかを振り抜かれたら、それで誰かが死んだりしたら――

（じよ、冗談じゃないわよっ！）

エレーンはぶるりと身震いした。

（なんで、あたしがこんな目に遭わなきゃなんないわけ？　なんで、いきなり、こんな物騒な話になっちゃうわけ？）

カップを持つ手が小刻みに震える。恐くて恐くて仕方がなかった。今からでも、取りやめにすることはできないだろうか。いや、それより何より、ここから逃げたい――！

開け放った窓の先では、青葉がさらさら揺れていた。梢の向こうは晴れわたり、緊迫した場にまるでそぐわぬ、そら恐ろしいくらいの晴天だ。

兵を鼓舞しているのだろうか、遠く歓声が聞こえてきた。野草ゆれる草原で、青い軍服に身を包み、手に手に武器を携えて、一分の隙もなく整列している軍人たち――そんな光景が目には浮かぶ。ケネルたちはどうしたろう。やはり武器を準備して、配置についているのだろうか。自分の敵を倒す為に。

彼らはまさに戦おうとしていた。そう、文字通り、命がけで。

ざわり、と胸がざわめいた。

微かに揺れていた違和感が、明確な形をとり始める。

鮮烈な疑念が湧き起こった。発端は他ならぬこの自分だ。なのに、きっかけを作った張本人は

――こんな所で、何をしている？

隊列を組む兵隊たち。助力を乞いに乗りこんだ遊民たちの天幕群、明るい窓辺にたむろしていた表情のない傭兵たち――

強く唇を噛みしめて、エレーンは顔を振りあげた。老執事の前ま

で、つかつか歩く。まったり茶を啜る執事の腕を、むんず、と片手でつかみ取った。

「行くわよ！ 爺！」

「……ど、どこへでございますかな？」

老執事はたじろいで首を傾げた。（いきなり、なに？）と言いたげだ。エレーンは焦れて宣言した。

「だから！ あの人たちの所へよ！」

呆けたような間があいた。

「……は？ あの一とたち？」

主人の言葉を虚ろな顔で復唱し、はっ、と執事が正気に戻った。

「え、えええーっ！」

悲鳴と共に、ひっし、と肘掛けにしがみつく。だが、苦節四十年の執事の不幸は、その手がとっさに滑ったことだ。

エレーンはふんぬ、と踏んばって、力尽くで引きはがした。ずるずる虚しく引きずられ、執事はじたばた元の椅子にしがみつく。

「じよ、冗談ではございませんぞ！——お放しください——お放しください！——そればかりは何とぞ平にご容赦をっ！ 爺は——爺はまだ死にとうはございませぬっ！」

すぐさま速やかに不参加を表明。だが、エレーンはまるで気にしない。

老執事の抵抗虚しく、重厚な扉がいよいよ迫った。もはや瀬戸ぎわ崖っぷちの老執事は、壁のへりへと果敢にダイブ。最後の砦としてみつき、ぶんぶん首振り、じたばたあがく。ぬう、とまなじり吊りあげて、エレーンは指を突きつけた。

「なっさけないわね！ あんた、それでも男なのっ！」

両足壁に踏んばって、その手を無情にも引っぺがす。

だって、彼らと約束したのだ。盾にはしないと。捨て駒にはしないと。彼らの身柄は自分が守ると。そうだ、どうして、自分だけのん気に茶など啜ってられる。

今、ここで逃げたりしたら、彼らに説いたあの言葉は全て嘘にな

ってしまう。いい加減でもお調子者でも構わない。だが、嘘つきになるのだけは絶対に駄目だ。同じ土地に生まれた同士と彼らにそう説いたのは、他の誰でもない、この自分ではないか。

あの約束は礎だ。^{いしづえ}ようやく芽吹いた信用なのだ。それはまだまだ弱くて儂い脆弱な基盤だ。

あの時、助力を請いには行ったが、まるで交渉になどならなかった。彼らを利用する何の権力も、^{ちから}自分は持ち合わせていないからだ。命を張るほどの見返りなんか、彼らにとっては、ないに等しい。それでも彼らは、助けてくれると言ったのだ。

正念場だった。ああして見得を切った以上、成すべきことが自分にはある。損なうわけにはいかなかった。彼らがくれた無償の好意を。繋いだこの手を離してしまえば、ようやく手に入れた信頼は、扨って立つ土台を失い、その根底から崩れてしまう。今、逃げるわけにはいかない。

人として。

「ほらあ！ 駄々をこねない！ さっさと行くっ！」

足を踏んばる老執事を、力任せにぐいぐい引っ張る。べりつと唐突に壁から剥がれた。

「さ、行くわよん！」

力尽きたらしい執事をもぎ取り、エレーンは嬉々として引きずった。まあ、理屈は確かにそうなんであるが、

（一人で行くのは、やっぱ恐いしィ？）

人には「本音」というものがある。

「こ、こ、この年寄り相手に、かようなご無体な仕打ちをなさるとはっ！」

執事が顔を振りあげた。うるうる涙目で訴える。

「奥様が当地に嫁せられてから早や一月、爺はかようなご教育をさせて頂いた覚えはございませんぞ。奥方様におかれましては、下々に接し遊ばす際には、いかなる場合も美しい笑みをゆめ絶やさず、ご温厚に、慎ましやかにと、それはそれは口やかましく申しあげた

はずでございます。目下に接しては寛容であれ、これこそが広大なるご領地を治め、多くの民を従えるこのクレスト領家に名を連ねるお方のご器量というものの、代々から伝わりまする揺るぎなき当家の家訓にございます！ それを領家の奥方ともあるうお方が高貴な方にはあるまじきお振る舞い。ああ、なんと嘆かわしい！ 下賤のような無作法をよもやかくも働かれるとは！ 爺は——爺は悲しゅうございますぞう！——あ、いや、ちよつとあの聞いてます？——あ、あ、急にぎっくり腰の按配がうっ！」

エレーンはずるずる引きずった。そんな戯言聞いちゃいない。

廊下で立ち働く白襟紺服のメイドらが、一行に気づいて戸惑ったように頭を下げた。いぶかしげな反応も無理はない。日頃、他者の会釈に鷹揚にうなづく公邸きつての重鎮が、今日はじたばた足を踏んぱり、引きずられていくというのだから。そう、威厳もへったくれもあつたものではない。

先頭を行くエレーンは、ただいま崖っぷちの執事の悲鳴も、顔を見合わせる使用人の疑義も、すべからくことん捨て置いた。

老執事の悲痛な叫びが、静かな屋敷にこだまする。その首根っこ引きずって、エレーンは口を引きむすび、赤絨毯の廊下を突き進む。不安と高揚を胸に秘め、静かな屋敷を飛びだした。

開戦2

「——これは、攻め込まれるな」

ケネル率いる遊民軍は、街道南の敵軍の様子を渋い顔で眺めていた。兵の数が圧倒的に多いのだ。パパは短髪の頭を掻きながら、右手に広がる街を眺めた。「バードを援護で行かせはしたが、あいつら素直に協力するかな。なにせ、ろくに武器さえない」

「武器ならあるぜ。問題ない」

パパの危惧に事もなげに応えて、ファレスは沿道を顎でさす。

「入り用だと思ってな。向こうからくすねてきておいた。剣と弓矢、それに火薬。その荷馬車に積んであるから、奴らに適当にばらまけよ。あの連中は器用だからな、大抵の武器は扱える」

「……国軍から強奪したのか」

ぽかんと彼らは口を開けた。あまりの手際の良さに言葉もない。確かにファレスは偵察帰りのようではあったが、まさか、武器の不足分まで調達してこようとは。だが、当人ファレスに気負った様子はまるでない。

「あれでも、まだ足りねえだろうが、後は敵を倒して掻き集めるしか手はねえな」

ホロのかかった山積みの積荷を、毒気を抜かれて眺めたパパが、呆れた顔で目を返した。

「よく中に入れたな。相手は素人同然とはいえ、ここは戦闘の最前線だぜ。侵入者には過敏になっていたろうに」

ファレスは平然と目を向けた。「起きたら女がいなくてよ。で、そいつの着物を拝借した」

「女のふりを？」

「ちよっと、そこいらうろついてやったら、大歓迎で入れてくれたぜ」

肩の凝りをほぐすように、ファレスは首を軽く回して、何食わぬ

顔で言い放つ。

薄ら寒い沈黙が、周囲にどんより立ちこめた。バパが逸早く我に返って、わざとらしく咳払いする。「あー、お前の日頃の女郎屋通いも、少しは役に立つようだな。それでお前、もしか、その……」
「なんだよ」

口ごもる相手を怪訝そうに見返して、ファレスはぶっきらぼうに先を促す。バパは言いにくそうに隣のアドルフアスと目配せした。

「——いや、まさかとは思うんだが——もしか、本当に、そいつらと——」

「んな訳ねえだろ、どこぞの変態野郎じゃあるめえし」

ファレスは閉口したように吐き捨てた。性的指向を疑われたらしい。

「目的は向こうの軍服だ。身包み剥いでふん縛っておいたから、まだ無様に転がってんだろ」

遙か敵陣を眺めやり、嘲るように鼻を鳴らす。だが、すぐにその目を返して、一同に視線を巡らせた。「そんなことは、どうでもいい。あの程度の得物があれば、これでなんとか応戦可能に——」

「ケネルーっ！」

額を寄せていた円陣が、飛びあがって振り向いた。

場違いで異質な甲高い声。声の方向に目をやれば、木漏れ日さしこむ街道の先から、何かがふわふわ駆けてくる。いや、わっせわっせと直進している。黒髪揺らして、ぶんぶん手を振り、にんまっと笑った満面の笑み。相手の正体に気づくなり、一同は啞然と立ちつくした。そう、あれは——

「ねー！ あたしにできること、なんかない？ なんでも手伝うから、どんどん言ってよー！」

一同は思考停止で絶句している。だって、駆けてきたのは誰だろう、クレスト領家の奥方ではないか。ちなみに、彼女が引きずっているのは、泡吹く寸前の老執事。

何が起きたかわからずに凍りついたままの一同をよそに、エレー

ンは、よいしょ、と到着した。乱れた呼吸を肩で整え、えへへ、と笑って一同を見回す。きよとん、とエレーンは視線を止めた。

「え？ なに？ どしたのよー。みんなして辛気臭い顔しちゃってさあ」

呆氣に取られて瞠目したきり、円陣は未だに反応できない。あめぐり口を開け、一言もない。いや、

「何考えてんだ！ あんたは！」

苛立った一喝が沈黙を裂いた。逸早く我に返ったのはケネルである。開口一番、険しい形相で怒鳴りつける。

「何をしに来た！ 危ないだろう！」

頭为天辺から叱咤を浴びて、エレーンは、うつ、とたじろいだ。だが、そこは庶民の出。そうすんなりとは負けてやらない。もそもそ逃げ腰を建て直し、爪先立ってふんぞり返った。「何しに来た”って、手伝いよ」

「手伝いい？」

ケネルは険悪そのものである。エレーンは、ずい、と胸を張る。

「だって、あんた達はどーなのよ」

「――あア！」

すぐむケネルの上着の胸に、ビシッと人差し指を突きつけた。

「あんた達だって危ないでしょうが。なのに屋敷であたしだけ、のうのうとかくまわれているの？ 冗談じゃないわ！ 見くびらないでよ。女だからってナメてんじゃないわよ。あたし、そんなにヤワじゃないしい？」

「……あんた、な」

前傾姿勢で見下ろして、ケネルは拳をわななかせている。何か言いたいようではあるが、言葉が見つからないものらしい。エレーンは、ふふん？ と顎を出し、不敵に笑って腕を組んだ。

「いいい？ あたしは領主の代行なのよ？ 領主っていうのは、戦の時に、指揮とかしたりするんでしょ。だったらもう始まんないでしょうが、このあたしがいなくっちゃあ！ だいたいねー。みんな

を危ない目に遭わせておいて、自分だけ雲隠れしようだなんてケチな見もってないわよ。そんなの言語道断でしょうが。あたし、そんな卑怯じゃないもん！」

大いに吠える。ここぞとばかりに。

ケネルはがつくりうなだれた。額をつかんで揉んでいる。呆れた顔で口を開けたファレスが、口を閉めがてら、ぼそりとこちた。「妙なのが出てきやがった……」

とびきり友好的な笑顔を作って、エレーンは突っ立ったままの一同を見渡す。

「みんなとあたし、約束したもん！ こんな大事な時なのに、引こんでるわけにはいかないじゃないのよ、んね？」

どんとこい、と大言壮語し、だが、最後のトコだけ媚びてみる。大風呂敷を広げるも、畳むつもりはあまりない。珍妙な流れを振り切るように、ケネルが大きく嘆息した。

「あんたに何ができると言うんだ。自分の屋敷にさっさと戻れ。——おい、そのの！」

かたわらの沿道に手を振って、仲間の傭兵を呼びつける。得物の準備をしていた男が、すぐさま、こちらに駆けてきた。怪訝そうに見返す顔に、ケネルは珍客を押しやった。

「急いでこれを、クレスト公邸に連れ戻せ」

むむっ、とエレーンはケネルを見た。どうやら、追っ払おうとの魂胆らしい。

「なあにすんのよ！ 放してよっ！」

直ちに憤然と手を払い、両手を腰に押し当てて。

「なに、その失礼な態度はあっ！ せっかく、あたし、応援にきたのにっ！」

忙しなく立ち働いていた傭兵たちが、ぎょっと飛びあがって振り向いた。甲高いキンキン声の発信源を特定し、呆氣にとられて立ちつくす。作業の手を止め、荷物運搬の足を止め、長に盾突く小柄な客を、たじろぎ、まじまじと眺めている。

ケネルが無然と腕を組んだ。それに負けじと、エレーンも膨れっ面で顎を出す。双方一步も引かぬ構えだ。エレーンは仏頂面を睨みつけ、両手を振り回して息まいた。

「あたしだって、ここにいます！ 荷物運びくらい、できるはずよ！」
「ここがどこだか分かっているのか！」

ケネルが頭ごなしに苛立った一喝。空気が怒声にビリビリ震え、周囲の傭兵が首をすくめる。だが、

「わかってるわよ！ そんなことっ！」

肝心のエレーンは聞いちゃいない。

「馬鹿野郎！ さっさと戻れ！」

「あ、馬鹿って言った？ 今、あたしのこと馬鹿って言った？ あのねー知ってるー？ 馬鹿って言う人が本当は一番——」

「なんだか知らんが、とっとと戻れ！ 邪魔だと言うのが分からんのか！」

「いや！ 戻らない！ あたしにだってできるもん！ 白衣の天使とか！」

「——はく——（一瞬、絶句）——そんな暇がどこにある！」

「なにそれ失礼っ！ ちゃあんと白いのに着替えてきたのに！」

奥方様は形から入るタイプである。

「それともなに？ あたしの治療じゃ不服なわけえっ！」

「そういう話をしてるんじゃないっ！」

双方、不穩に睨み合い、互いに一步も譲らない。

置いてけぼりにされた一同は、手持ち無沙汰そうに待機していた。初めの内こそ、長と珍客の言い合いを物珍しそうに見ていたが、あんまり終わらないものだから、いささか飽きてきたらしい。今では軸足を踏みかえて、得物で肩など叩いている。件の長髪に至っては、大あくびなんかこいてる始末だ。

長と客の言い合いは、けんけんがくがく延々と続く。のどかに揺れる高枝で、かあ、と鳥が呆れて鳴いた。

エレーンは断固たる腕組みで、ぷい、とケネルから、そっぽを向

く。

「あたし、絶く対に帰らないからねっ！　誰がなんと言おうが絶対に！」

向かいの恐い顔など物ともせず、どんとこい、と不退転宣言。ケネルも不敵に腕を組んだ。

「やせ我慢は止めておけ。そんなのん気なことをほざいていると、取り返しがつかなくなるぞ」

「あーら、あたしはあんた達と一緒にいるわよ。約束したもん」

「なら、いれーばー？」

声のんびり割りこんだ。

ケネルが飛びあがって振り返る。

「ウォード！　無責任な発言をするな！」

薄茶の髪 of 若者が、ぶらぶらこちらに歩いてきていた。背が高く痩せてはいるが、長身瘦躯というよりは、やたらと「ひよろ長い」印象だ。開戦前で切迫した状況というのに、ジャーキーを無造作にかじっている。

「なにコイツ。おもしれー」

かじりかけのジャーキーの先で、辿りつくなり、客をさす。こいつも、さっぱり聞いてない。

登場するなりいきなり笑われ、エレーンは憮然と目を向けた。無邪気な顔だが、なんか腹立つ。もちろん、こっちは大真面目。

（あんた、なによー。邪魔しないでよー）と口を尖らせ、見知らぬノッポにぶいぶい対抗。もっとも、当のウォードの方は、のれんに腕押し、上機嫌の様子だが。ちなみに、当該交渉の論点については、完全無視の態度である。いや、そもそも食ってる場合か？

ケネルは無言でうなだれた。額をつかんで揉みほぐす。げんなりうつむいたその顔には（馬鹿ばっかりだ。頭痛がする……）と彼の気苦労が書いてある。

ともあれ、そろそろ開戦だ。そこらにコレを放っぽって、戦いに行くわけには無論いかない。ケネルは嘆息で顔をあげた。

「わかった。あんたの気遣いには感謝する。だから早く屋敷に戻れ」
このとんでもない楽天家を速やかに他所へと撤去すべく、萎えかけた氣力を奮い起こして申し渡す。ひよろ長くも無礼な闖入者に対抗していたエレーンは「んん……？」とケネルに目を戻した。ケネルの顔をじつと見る。そして、

「いや！」

ぷい、とつれなくそっぱを向いた。実は感謝のかけらもないケネルの真意を、容易に看破したらしい。ケネルは持て余した顔で頭を掻いた。

「妙な駄々をこねるなよ。ここにいると危ないんだ。な？　早く帰ろうな？」

客の身長に合わせて上体をかがめ、幼児に言って聞かせる口調である。エレーンは膨れっ面で腕を組み、徹底抗戦の意思表示。「いやよ！」

「あんたの応援は必要ない。運搬の手も足りている。あんたがここにいる理由はない」

「嫌ったらいやっ！　い、や、よっ！」

「さっさと戻れ！　邪魔なんだよ！　そもそもあんた分かってないだろ、戦がどんなものなのか。ここにいたら、あつという間に踏み潰されて、あんたなんかけちゅんけちゅんに——！」

ケネル隊長、務めて冷静に対処しようとは、している。

降って湧いた珍騒動を、パパは啞然と見ていたが、我に返って瞬く、苦笑いで沿道を見た。

「ほう、弓矢があるのか。助かるな」

わざとらしく声を張りあげる。脇の荷馬車に山積しているのは、奪取してきた得物の数々。珍妙な舌戦をかつたるそうに見ていたフアレスも、話を振られて振り向いた。

「可能な限り持ち出してきたが、向こうにも、たんまり残っている。弓はあらかた弦を切ったが、射手の手持ちがあるからな。全部潰したわけでもない。そいつで射掛けられたら打つ手がねえな。家が南

に面した奴らは避難させる方がいい」

「火矢を打ち込まれたら一溜まりもないな。家が燃えれば、延焼が始まる。そうなりゃ、消火の手が必要だ。今の内に、中の奴らに――」

「ま、火災はある程度防げるだろう。油はあらかた、別の用途で使ってきたから」

「別の用途？」

ふと、ケネルが聞き咎めた。不毛な睨めっこを中断し、いぶかしげに振り返る。「ファレス、お前、何をした――」

凄まじい爆音がとどろいた。

一瞬後、凶暴な爆風が巻き起こる。驚愕したような大勢の悲鳴。敵陣のある街道の先が黒煙をあげて炎上している。発火地点は陣の後方、被害は広範囲にわたる様子だ。

爆発音が連続して起こった。敵の動きが慌しくなり、兵の多くが馬を後方へ走らせている。

「――なんだ、事故か。こんな時に」

ケネルがいぶかるように腕を組んだ。バパも釈然としない顔で首をかしげる。

「戦に不慣れな兵隊だからな。火薬の扱いでも間違えたか。とはいえ、こいつは随分大掛かりだな。俺もこういうのは初めて見る。こうまで誘爆するものか？」

ウオードは無言で突っ立ったまま、薄茶の瞳を眇めている。アドルフアスが片頬で苦笑いした。「自滅か。こいつは幸先がいい。手間が省けて丁度いいってもんだぜ」

黒煙が一带に立ちこめていた。黒い人影が煙に紛れて、右往左往して叫んでいる。火勢が強い。飛び交う怒声。狼狽した悲鳴。恐慌に陥り、混乱している。消火の手が必要なのは、どうやら先方だったようだ。ケネルが長髪に目をやった。

「ファレス、お前、何をした」

向かいの様子を眺めたままで、ファレスは口端を吊りあげた。

「三百はいったな。これで残りは九百だ」

一同、弾かれたように振り向いた。ファレスが試算したその意味を瞬時に悟ったものらしい。ファレスの端整な横顔が、炎の赤に照り返されている。ケネルは身じろぎ、苦笑いした。

「やはりファレス、お前の仕業か。なるほど、さっき言っていた”別の用途”が”これ”だったというわけだ」

「こうでもしなけりゃ、どうしようもねえだろ」

嘲るように鼻を鳴らして、ファレスは大儀そうに首を回す。

「敵がああして固まっている時には、この手の荒技は効果的だ。食料庫をぶっ潰して、周囲に油をまいてやった。仕上げは簡単な起爆装置」

「——やるもんだな。敵が一気に四分の三かよ」

恐れ入ったというように、アドルフアスが軽く口笛を吹いた。ファレスは淡々とそれに応じる。

「ま、相手が不慣れな兵隊だからこそ、子供騙しの芸当だな。お陰で武器も持ち出せた。戦慣れした軍兵相手じゃ、こうはいかない」

敵陣は混乱の坩堝るつぼと化した。淡々と眺める一同の顔には、憐れみのかけらも浮かんではいない。その中でただ一人、エレーンは驚愕に目をみはっていた。

開戦3

彼らの平然とした話し声が、遠く淡々と聞こえていた。炎に焼かれて、悶え、のたうち、悲鳴をあげて苦しむ人影。その地獄絵図のような光景を眺めて、彼らは淡々と言い交わしている。あたかも、実験結果でも見るように。

彼らは如何にも手慣れていた。どの顔にも、動揺もやましきもかけらもない。戦禍の原因を作ったファレスも、軽く腕を組んだまま、無感慨に見届けている。今まさに死にゆこうとする己が手にかけて人々を。

「……そ、んな」

エレーンは愕然と立ちつくした。かつて味わったことのない衝撃に、足は震え、頭の中は真っ白だ。たった今、目の前で、多くの命が断たれたのだ。しかも、わずか一瞬で。

頭の中が朦朧とした。指先をわずかでも動かせば、叫び出してしまいそうだ。音の全てがざわめきと化し、言葉の意味が虚ろな体を素通りする。そんな中、ファレスに話しかけるアドルフアスの濁声が、不意に耳に飛び込んできた。

「——しかし、三百を一度に消し去るとはな」

目の端に写ったファレスは、戦禍に目をやったままだ。

「どうでもいいような雑魚どもだが、あんな障害もんでもない方が、バードの負担は軽くなる。まあ、これで少しは戦況が有利に——」

「人の命を、なんだと思っているの！」

平手の音が轟いた。周囲が弾かれたように振り返る。

「——痛って」

顔をしかめて頬をさすり、ファレスが剣呑に見下ろした。薄茶の長髪を額で分けた端正な顔。

「何しやがる！ このアマ！」

目がかち合ったその刹那、ファレスが胸倉をつかみあげた。一気

に乱暴に吊るしあげられ、エレーンは顔をゆがめて爪先立つ。喉がのけぞった息苦しさをこらえ、精一杯相手を睨んだ。「わかってるの？　自分が今、何をしたのか」

「――あア？」

長髪はうるさそうに舌打ちする。

「あんたは人を殺したのよ！　生きてる人に火を点けたのよ！」

「それが、どうした！」

固い拳を両手でつかんで、エレーンは顔を振りあげた。

「人が死ぬのがどういうことか、あんた、ちっともわかってない！　どんなに泣いてわめいても、二度と戻ってこないのよ！」

「――何を勘違いしていやがんだ」

忌々しげに呟いて、ファレスが舌打ちで突き離れた。その腕をケネルがつかんでいるから、長に制止されたらしい。地面に乱暴に投げ出され、うつむいて咳き込むエレーンに、ファレスは苛立った目を向ける。

「助けてくれ、と言ったのは、てめえの方だろうがよ！」

驚いて、エレーンは顔をあげた。

「違う！　あんなこと頼んでない！　殺して欲しいなんて頼んでない！　なのに、あんたは平然と――。人でなし！　あんなの卑怯よ！　あの人達にだって、家で待っている家族がいたのよ。それを、あんたは虫けらみたいに――！」

「綺麗事ぬかしてんじゃねえよ、ねえちゃん」

剣呑な声音で罵倒を遮り、ファレスは荒々しく目をむいた。

「だったら、こんな劣勢でどうすりゃいい！　中には使えねえ素人しかいねえってのに、軍隊相手に楯突こうってんだぞ！　卑怯？　人でなし？　結構だね！　もう後がねえってのに形振り構ってられつかよ！」

「殺さないで！」

「――あア？」

ファレスの足に取りすがり、エレーンは冷淡な顔を凝視する。

「あの人達を殺さないで！ もうこれ以上殺さないで！ なにも殺さなくたっていいはずよ。捕まえれば済むことじゃない。——ね、お願い。殺さないで！」

ファレスが怯んだように口をつぐんだ。だが、すぐに、苦虫噛み潰した顔で目をそらした。

「——馬鹿言ってるじゃねえ。こっちの何十倍だと思っていやがる。たく、いい気なもんだぜ。これだから何も知らねえ堅気はよ！ 甘ったれたこと、ほざいてんじゃねえよ。向こうは殺^やりにくるんだぞ」
いかにも面倒そうに舌打ちする。だが、どこか居心地の悪そうな面持ちだ。微かな希望をそこに見出し、エレーンは語気を強めて言い募った。

「ね、あたし、なんでもする！ ここでみんなを応援する！ あんたのことを——みんなのことを、あたしがここで支えるから！ だからお願い。あの人達を殺さないで！」

迷惑そうに柳眉をひそめて、ファレスは顔を背けている。周囲で眺める面々も困惑したような顔つきだ。

エレーンはもどかしい思いで唇を噛んだ。想いがまるで伝わらない。彼らの持つ感覚は、自分のそれとはかけ離れている。事態は刻一刻と進んでいく。後戻りできないところまで、既に来てしまったのだ。

恐ろしい程の焦燥に駆られて、エレーンは青ざめて立ちすくんだ。人一人を失う事がどれほどの苦痛をもたらすか、嫌というほど知っている。殺してくれるなどの懇願は、本来容れられて然るべきだ。なのに、その「当たり前」が通じない。ひしひし身に沁みて実感した。

（これが、戦争……）

紙面の文字でしか見たことのない、これが”戦争”

異常だとは思えなかった。人と人が殺し合う、まともな神経でできる事じゃない。だが、そうした想いの一方で、彼らにそれを依頼したのは、他でもないこの自分なのだ。ならば、これが、自分

が彼らに望んだこと？

「……違う」

戦慄が走り、エレーンは強く首を振った。殺し合いなど望んでいない。そんなことは頼んでいない。なのに、現に起こったことは——
(あたしの、せい？)

これは全部自分のせい？ 自分が彼らを殺してしまった？ この人達に頼んだから？

(——どうしよう)

エレーンは愕然と唇を噛んだ。呼吸が浅く荒くなる。狼狽と後悔でめまいがする。鼓動が苦しいほどに速かった。動転した胸中で、誤魔化しようのない自覚がせりあがる。

——取り返しのつかないことを、した。

どす黒い動揺が湧き起こり、エレーンは唇を噛みしめる。

「……こんなはずじゃ」

こんなはずじゃ、なかった！

いても立ってもいられずに、ファレスに顔を振りあげた。

「殺さないで——お願い、殺さないで！」

言葉を知らない幼児のように、それだけを遮二無二訴える。ファレスは鬱陶しげに一瞥し、うるさそうに舌打ちした。「又きたか」という顔だ。エレーンは臆せず、彼の視界に割りこんだ。

「ね、お願い、殺さないで！ あんたの言うこと、なんでもきく。できることなら、なんでもする。だから！——だから！ だからお願い！ 殺さないで！」

「いい加減にしろ」

腕を後ろから引っ立てられた。

「これは戦だ。敵を殺らなきゃ、こっちが殺られる」

淡々としたケネルの言葉に、エレーンは慌てて首を振る。「で、でも違う。あたしが頼んだのはあんなことじゃ——」

「戦になれば、人は死ぬ。当たり前の話だ。あんたも啖呵を切って戦端を開いたんなら、少しは心得ておくことだ。——おい、その

！」

辟易したように嘆息し、ケネルは沿道に振り向いた。

「何をしている。さっさと屋敷に連れていけ」

呆氣にとられて見ていた二人が、我に返って駆けてきた。エレインは慌てて取りついた。「でも違う！　あたしはあんな——！」

「邪魔臭いから引っこんでいろ。それと、その執事！」

「——は、はいっ！」

ケネルが怒鳴った茂みから、何かが弾かれたように飛び出した。ケネルの怒気を警戒しつつも、そろりそろりと寄ってくる。

「……お、お呼びで？」

ご機嫌伺いのへらへら揉み手で現れたのは、こっそり見ていた老執事である。ケネルが憮然と目を向けた。

「こいつをしっかり見張っておけ。二度と部屋から出すんじゃないぞ。うるさくてかなわん」

「——ケネル！」

たまりかねて、エレインは叫んだ。だが、ケネルはもう目もくれない。つかまれた腕を振り解こうにも、力が強くて動けない。指名を受けた先の二人が、エレインの腕を両側から取った。「さ、奥方様。参りましょう」

「隊長を怒らせるのは、ウマくありませんよ」

引っ抱えるようにして歩き出す。エレインは慌てて身をよじった。

「ちょ、ちよっと！　なにすんのよあんだ達！　放しなさいよ！」

放しなさいってばっ！　あたしはまだ帰らないー！　ちよっとお！

帰らないってば！　帰らないって言ってんでしょっ！」

苦笑いしている二人の足を、力任せに蹴り飛ばす。二人の男は「痛てて」などと言ってはいるが、効いていないのは明らかだ。腕を取られて引きずられながらも、エレインは必死で振り向いた。

「だって、あたし約束したもん！　みんなのことを守るって！　だったら、やっぱ一緒にいないと！　ケネル、あんたも聞いてたでしょー。ケネル！　ケネルってば！——て、ちよっとあんだシカトし

てんじゃないわよ！——もー！ 放してよ！ 放せっつつてんのが聞こえないのっ！ だからねー、あたしはまだ、こっちにいないと——！

薄い頭に手を当てて、老執事が嘆かわしげに嘆息した。

「奥様、はしたない真似はおやめ下され。爺はとても恥ずかしい」

だが、生憎エレーンはそれどころではないのだ。ぶんぶん首を左右に振って、目いっぱい大声でわめき散らす。

「手え放せっつつてんのよっ！ 聞こえないのでくの坊！ さっさと放さないと噛みつくわよっ！」

だが、足が地にさえ着いていない。

健闘むなしく、エレーンはどうとう摘まみ出された。足を踏んばって抵抗するも、屈強な男二人にがちり左右を固められては、もはや敵う道理もなかった。

キンキンわめく音源が、二本の轍わだちを地面に残して次第次第に遠ざかる。傭兵たちは立ちつくし、茫然とそれを見送っていた。

「——俺たちを守ってくれるんだとよ。あの細腕でなあ」

やがて、苦笑いの呟きが、気の抜けた街道にポツリと落ちた。屈強な体躯のアドルファスが一人うんうん頷いて、片手で蓬髪を掻いている。顔をあげ、周囲をさばさば振り向いた。

「おう、聞いたかよ。我らが女神様は勇ましいことだな！」

街道で眺めていた仲間たちも、準備の手を止め、困ったような笑みで見返した。

「殺さないでくれ、か」

アドルファスの隣で聞いていたバパが、苦笑いで顎をなでた。

「ここは一つ、カレリアの腰抜けどもに見せつけてやるとするか、歴然とした差って奴を。それとも」

聞こえよがしに一瞥する。

「何十倍もの敵が相手じゃ”腰が引けちまうかな？”」

「――ぬかせ。俺を誰だと思っていやがる」

あてこすられて、ファレスは忌々しげに舌打ちした。その応えを口笛で囃して、バパは笑う。

「ならば結構。ついては、残りの敵は高々九百、一人頭三十つとこだ。斬っても斬っても飽きるほど湧いてはくるだろうが、これも自己鍛錬の良い機会、そうとも思えばいいさ。ともあれ――」

ふざけた口調を改めて、冷静な視線を敵陣に向ける。

「副長が作ってくれた折角の好機だ。あの混乱に乗じて戦力を削いでおきたいが」

思慮深げな茶色の瞳は、燃えあがった炎の向こうを、慌しく行き来する人影を、何事か測るかのように見つめている。今度こそきっちり名指しされ、ファレスは素っ気なく顎をしゃくった。

「ああも統制がバラバラなら、手もなく突き崩せるぜ。大半は手負いで、食料庫の消火におおわらわだ。こんな田舎じゃ食いもんの補給は難しいからな。本隊がある商都の方は主力の大軍が詰めていて、こっちにくれてやる余裕はなからうし、自領トラビアは更に遠い。

後は付近の農家から強奪するより手はねえが、いきなり、あの大人数じゃ賄いようがない」

「大所帯ってのが裏目に出たな。こうなると、一日分を工面するだけでも至難の業だ」

バパもおもむろに相槌をうつ。敵の動揺を眺めやり、ファレスは嘲るように目を眇めた。「どんなに偉そうにほざこうが、人間、食いもんがなけりゃ戦えやしねえ。たった一日食わねえだけでフラフラだ。これが二日となり、三日となれば、戦どころの騒ぎじゃなくなる。腹をすかせた奴らは惨めだぜ。後は、お定まりの食いもんの奪い合いだ。引きかえこっちは、すべからく万全の態勢で、飢えでふらついた手負いの足を軽く払ってやるだけでいい。叩くのなんざ、わけはない」

淡々と語る冷酷な声音に、一同はたじろいで沈黙した。誰も口を挟みはしないが、口をつぐんだどの顔にも（悪魔のような奴……）

との正直な感想が書かれている。こいつだけは敵に回したくない、とは誰もが抱いた実感だろう。

「とにかく用意は整った。さてと」

ファレスはさばさば切りあげて、中央のケネルに目配せした。

「どうする、隊長」

傭兵たちが一斉にケネルの方へと目を向ける。彼らは出陣の合図を待っていた。命を削る戦を控え、だが、どの顔の口元にも、不敵な笑みが浮いている。

命を預ける部下たちに、ケネルは視線を巡らせた。

「ここは一気に削りにかかるぞ。総員、心してかれ」

夕暮れの道

赤味がさした街の景色に、蒼闇がひっそり息づいていた。街へと続く街道を、夕陽が赤く照らしている。そんな中、仕事を終えた傭兵たちが得物を引っ下げ、かつたるそうに引き揚げてくる。彼らがその手に引っ立てているのは軍服姿の捕虜たちだ。うなだれ、疲れ果てた捕虜たちの顔は血と泥とで薄汚れ、色鮮やかな青軍服も所々切り裂かれている。

ケネル率いる遊民軍は、見張りを数名街道に残して、街の北に位置している根城の天幕群へと引き揚げていた。さし迫った敵軍を押し戻すことに成功したのだ。もっとも残兵はまだまだ多く、撃破するまでには到っていない。

沿道の高木の陰を出て、エレーンはそろそろ近寄った。人影に紛れてやってきた目当ての人物に駆け寄って、作り笑顔でぎこちなく手を振る。

「お、お疲れー、ケネル、迎えにきたわー」

ふと、ケネルが顔をあげた。視線を巡らせ、相手を認め、たちまち苦虫噛み潰す。

「――また来たのか、性懲りもなく」

持て余したように頭を掻いて、何気なく辺りを見回した。誰かに押し付けようとの魂胆らしい。だが、街道を行き交う傭兵たちは大抵捕虜を連行していて、各々の仕事で忙しい。やむなくケネルは嘆息し、ぶっきらぼうに足を向けた。

「当分攻めてはこないだろう。この間に、女子供や入口付近の住民を奥まった場所に移しておけ。ああ、貴族街ならうってつけだ。堀が屋敷を取り巻いているから、防衛線を突破されても、対処する時間が多少は稼げる」

「う、うん！ わかった！ そうする！ そうする！」

開口一番次々指示され、エレーンはたじろぎ笑いで、ぎこちなくうなづく。「ケネルの言うことなら何だって聞くから、何かあったら、じゃんじゃん言ってよ！」

まったく会釈も愛想もありはしない——内心ぶつくさ文句を垂れつつ、作り笑顔でうかがった。「そ、それから？」

「それから」

ケネルはおもむろに腕を組み、じろりと視線を振り向けた。

「ここへは来るな、と言ったはずだな」

お愛想笑いで凍りつき、エレーンはそそくさ目を逸らす。脅しかけてはさすが本職、えも言われぬ迫力だ。ダドリーと喧嘩するのなんかとはわけが違う。一方、けんもほろろだった傭兵たちは、何故か和やかな雰囲気だ。笑顔で手を振る者さえいる——顕著な変化にはたと気づいて、エレーンもぶんぶん振りかえす。

「み、みんなあつ！ お疲れ〜！」

彼らの唐突な豹変振りに調子が狂って戸惑うが、睨まれるよりはずっといい。

足を止めて見ていたケネルが、やれやれと首を振った。肩を返して、ぶつきらぼうに歩き出す。

「——ちよ、ちよっと待ってよ、ケネルっ！」

エレーンは慌てて追いかけた。

「疲れている。話しかけないでくれ」

ぶらぶら歩いているように見えて、そのくせ結構な早足だ。もたもたしていると、どんどん歩いていってしまう。エレーンは小走りで隣に並ぶ。「あのっ！——ありがとねケネル！」

「なにが」

ケネルはまるで見向きもしない。碌に話してもいないのに眉をひそめて鬱陶しげ。エレーンはわたわた食い下がる。「だから、あの

——捕まえてくれたんでしょ、あの人たち」

戸惑ったような間があいた。

しばらく無言で足を運び、ケネルはぶつきらぼうに言い返す。「

礼を言われる筋合いはない。そんな指示をした覚えはない」

「でも、女男もあんなにたくさん——」

「女男？」

ほらあそこ、と指で示した先を追い、ケネルは怪訝そうに目を向ける。北へ引き揚げる背の中に、捕虜を引き連れた長髪がいた。横顔がどこことなく機嫌がいい。

「奴は腕がいいからな。見た目と違って」

一瞥したケネルの顔には、たじろいだような色がある。曰く（もうチェックしてんのかよ。目敏いなこいつ……）

ちら、とエレーンはうかがった。「でも、ケネルも捕まえてくれたんでしょう？ 殺さずに」

ケネルが怯んだように口をつぐんだ。しばし返事をためらって、渋々ぶつきらぼうに口を開く。「——ああ」

「ほーら、やっぱり！」

エレーンは会心の笑みで手を打った。「そうじゃないかと思ってたんだ。だあってケネル、実はいい人そうだもん！」

ケネルが頬をひくつかせた。だが、仏頂面で目をそむけ、かったるそうに歩き出す。

「——あっ！ 待ってってば！」

エレーンはあたふた後を追った。この街道の突き当たりには、傭兵たちが詰めていた件の荒んだ天幕群がある。入口の見張りが手強くて中には中々入れないから、うかうかしていて戻られてしまえば、引きこもられてそれきりだ。大股で歩くケネルに取りつき、とびきりの笑顔で仰ぎやった。「ねーねー、ケネルー。恐かったあー？」

「別に」

「ねえ、ケネル。怪我とかは？」

「なんともない」

「あ、でも、ちょっとくらいは——」

「どこも、なんともない」

やっぱり、ケネルはけんもほろろ。だが、一日中戦って、すり傷

一つこさえないなど、そんなことがありうるだろうか。疑いのまなざしでうかがった。

「本当〜にいく？　ねー、遠慮しないでちゃんと行ってよー？　ちゃあんと手当てしたげるから。ほくら見て見て？　色々持ってきたんだから〜。消毒薬にガーゼに包帯でしょ？　あ、安心して？　そーゆーの、あたし得意だから。実は、ちょっと前まであのラトキエのお屋敷でね〜」

ケネルが大きく嘆息した。

「……ねー、そういう態度はないんじゃないのー？　せっかく戻ってくるのを待っていたのに。——ねえ、ケネル、あたしの話ちゃんと聞いているー？　ケネルってば！」

だが、夕陽に照らされた横顔は、もう何を言っても反応しない。歩く足さえ止めようとはしない。

作業をしている傭兵が、大声で仲間を呼んでいた。軍靴を引きずる大勢の足音。戦の後始末を手際良くしながら、ぶらぶら歩く傭兵たち、気怠い風情で引かれていく諦め顔の軍服たち、その何れもが影を引きずり、薄暗くなりかけた夕暮れの街道を行き交っている。

ケネルの後をあくせく追いかけ、エレーンは黙々と道を歩いた。だが、黙っているのも気詰まりで、そわそわ隣を盗み見る。案の定、すぐに沈黙に耐えられなくなり、ケネルの袖を引っばった。「……ねーケネル〜。もっとゆっくり歩いてよー。ねーケネルー。ねえってば〜」

「どこまでついて来る気だ」

突き放したような物言いに、エレーンは怯んで足を止めた。ケネルは殊更に嘆息し、たまりかねたように振り返る。

「何故、俺につきまとう。いつもいつも、うろちよろと」

エレーンはたじろいで言葉を飲んだ。その不躰な言い草に気づいて、慥然とケネルに言い返す。「べっ、別にあたしは、つきまとってなんか——」

「だったら何故、大人しくしない。何故、屋敷で報告を待たない。」

平気でこんな所までしゃしゃり出てくる。戦は遊びじゃないんだぞ。大事に至らなかったから良いようなものの、何かあったら、どうするつもりだ。あんたは領家の奥方だろう」

出来ない子供を叱るように、ケネルは容赦なく語気を強める。他人に頭ごなしに咎められ、エレーンは不貞腐ってケネルを見た。だが、指摘自体は的を射ていて反論する余地はない。せめて不服顔で見あげるが、ケネルは視線を逸らさない。これが街の男であれば、面倒事を回避して容易く迎合するところだが、ことこのケネルには、他人の立場に便宜をはかる——遠慮という対処はない。顔を合わせ当初から、ケネルは常に決然としていて、異性で領家に属する彼女にも甘やかすことなく接していたが、その厳しい態度はぶれることなく今もなお一貫している。そして今後も、虚偽脅しなどには乗らないだろう。彼は自分の判断に絶対の自信を持っているのだ。それは、背後に控えた多くの仲間を後ろ盾にしているのことも知れないし、自身の強い腕力を頼みにしているのことも知れない。或いは、これまで彼が培った経験則の裏付けあつてのことかも知れない。いずれにせよ、相手を屈服させる説得力が、それほど年嵩というわけでもない目の前の男には備わっている。つまり、安易で不当な我がままは、ケネルには一切通用しない。拗ねて見せても無駄と悟って、エレーンは渋々目をそらした。

「……だって、あたしのせいだもん。あたしが頼んだことだもん。もしも、みんなに何かあったら」

ケネルが呆れたように嘆息した。「俺たちはそんなに柔じゃない。あんたに心配されるほど落ちぶれちゃいない」

「でも！」

「約束は守る。あんたとあんたのこの街は、けりがつくまで守つてやる」

「——でも」ともどかしくあげた目が、ケネルの直視とぶつかった。とっさに気圧され、目を逸らし、エレーンはうろたえて小石を蹴る。「でも、なんかいたたまれなくて。だって、あたしが——」

「そう不安そうな顔をするな。いくら旦那が――」

え？ とケネルの顔を見た。持て余したようになだめていたケネルが、我に返って口をつぐむ。

「――ああ、いや」

言葉を濁し、ばつ悪そうに目を逸らした。日頃は率直な物言いだけに、歯切れの悪さがそぐわない。エレーンは怪訝にうかがった。

「なによー。ダドリーがどうかした？」

「別に」

ケネルはにべもなく目をそむけた。だが、ケネルが漏らした「旦那」というのは、明らかにあのダドリーのことだ――はた、と含みに気がついて、エレーンは憤然と睨みつけた。

「あーわかった！ 悪口言うつもりでしょー。こんな時に領主がいなくて無責任だとかなんとかって。でも、いくらケネルでも、そんなこと言ったら許さないんだから――！」

「そうじゃない」

ケネルはうるさげに嘆息で遮る。だが、エレーンはそんなことでは誤魔化されない。キツとまなじり吊りあげた。

「だったら今のはなんなわけ？ ダドは商都のことが心配で、様子を見に行っただけよ。ディールがこっちに來るなんて、まさか夢にも思わないもん。だから、ダドは――！」

ケネルが苛立ったように一瞥した。

「あの女とガキ、始末してやろうか」

エレーンは胸を突かれて息を飲んだ。不意打ちにうまく働かない頭で、放たれた一言を反芻する。”女とガキ”――つまり、サビーネとクリードのことだ。つまり、ケネルはあの母子を「亡き者にしてやろうか」と持ちかけているのだ。

「な、なに馬鹿なこと言ってるのよ！」

とっさに誘いを突っぱねた。務めて平静を装うが、その語尾がわずかに震える。

「なんでいきなり、そんな物騒な話になっちゃうわけ？ 仮にも人

の、命なのよ」

諫める口調で続けたものの、視線を合わせてもらえない。

「へ、変な冗談はやめてよね。あたしはそんなこと、これっぽっちも——」

「邪魔なんだろう、あいつらが」

ケネルは素っ気なく核心を突いた。腕を組み、真正面から目を向ける。

「今なら、単なる事故で済む。敵の軍勢が押し寄せているから、騒ぎに乗じて何とでもできる。そうなりゃあんたは、晴れて旦那を独占できる」

夕陽に半面を照らされて、対峙して見据えるケネルは真顔だ。試すかのように目をすがめ、人の悪い笑みを頬にのせた。

「こんな好機は滅多にないぜ。この機を逃せば、この先一度あるかどうかだ。あんたが依頼をすると言うなら、俺には受ける用意がある」

血なまぐさい話をしているというのに、声に乱れは全くない。いや、それも不思議なことではない。彼は現役の傭兵なのだ。命を奪い、他人を襲う、それが元よりの生業だ。こちらが聞けば震えあがるような話でも、この彼にしてみれば、通常業務の一環に過ぎない。片方の足に重心を預けて、ケネルは無言で眺めている。表情のない面持ちからは、彼が何を考えているのか、何故こんな打診を持ちかけたのか、片鱗さえもつかめない。むしろ、心を見透かされそうな恐さを感じて、盗み見の視線を慌てて外す。急かすでもなく打ち消すでもなく、ケネルは返事を待っている——

「……あ、あたしは……」

息を飲んで硬直したまま、エレインはわずかに足を引く。領邸の壁に降りかかる血しぶきが鮮烈に脳裏をよぎった。そのむごたらしい有り様がにわかに急速に現実味を帯び、肩から、頭上から覆い被さる。握った指が小刻みに震えた。喉は緊張にこわばって、からからに渴いてしまっている。——いや、早く突っぱねなければ。きつ

ぱり言うのだ、その気はない、と。

禍根を残すような態度は駄目だ。曖昧さが少しでも残れば、相手はそれを脈ありと見なして先走った行動に出るかもしれない。荒っぽい稼業のならず者は、そうして言質を巧みにとって法外な報酬を要求すると聞いている。無論、ケネルがそうした輩と全くの同類とは思わないが、とはいえ、慣例が通じる相手でもない。彼らは馴染みの商人ではなく、常識を異にする異邦人だ。言葉を尽くした理屈より腕力に訴えるきらいもある。よくは知らない相手に対して、火種になるようなものを残すのは危険だ。付け入る隙を与えてはならない。打診を受けてしまった以上、あやふやにしたまま別れてしまえば、後々問題にならないとも限らない。けれど――

向き直った革ジャンの肩を、赤い斜光が照らしていた。肩には届かぬ黒髪が、風にわずかにゆれている。街道は片付けの段階に入り、気怠そうな風情の傭兵たちがざわめきと共に行きすぎる。衣擦れの音が耳に届いて、ケネルが足を踏み出した。

「その気になったら言ってくれ。力になるぜ」

そむけた肩にかけられた言葉は、買い物を頼むかのような気楽さだった。朦朧としつつも顔をあげ、エレーンは唇を震わせて立ちつくす。

――早く否定をしなければ。

早く彼を追いかけて、笑い飛ばしてしまわねば。彼が行ってしまうその前に。あの幸せな妾子に対して、そんな敵意は抱いていない。自分は害意など抱いていない。北カレリア繁栄の為には、嫡子の存在は重要だ。血統を継ぐ候補者は多ければ多いほど好ましい。ならば、屋台骨を支えるあの母子を、愛し、慈しみ、見守ってやるのが、領家の奥方たる自分の務めだ。彼らとの関係は円満で、問題は何ら存在しない。まして抹殺したいなど、そんなこと露ほども望んではいない。

――本当に？

夕闇に包まれた天幕群に向け、黒い髪の傭兵の背が、かつたるそ

うに歩いていく。斜光に染まった街道が、いやに赤く、いやに眩しい。声が喉から出なかった。焦燥ばかりが身を焼いて、手足が痺れたようになっていた。

生ぬるい西風が、髪をゆるくさらっていた。膨張した意識の端で、ざわめきが遠く聞こえていた。立ち働く男たちの声。後ろから来て行きすぎる気配。人影が脇を通りすぎ、それぞれがそれぞれの在るべき場所へと引き揚げていく。いく人も、いく人も。

徐々に遠ざかる背を見つめ、エレーンは硬直して立ちつくしていた。ただの一步が踏み出せない。

握りこんだ指が震えていた。後を追おうとする足に、体が引き留まるべく抗っていた。燃え立つような大きな夕陽が、今まさに暮れようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569v/>

CROSS ROAD【ディール急襲】 第一部

2011年11月7日13時06分発行